

ライブラリーを科学する : 九州大学大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻設置記念シンポジウム報告書

<https://doi.org/10.15017/19427>

出版情報 : イベント等資料, 2011-03. 九州大学大学院統合新領域学府 ライブラリーサイエンス専攻設置
準備委員会
バージョン :
権利関係 :

ライブラリーを科学する

九州大学大学院 統合新領域学府
ライブラリーサイエンス専攻
設置記念シンポジウム報告書

Department of Library Science
Graduate School of Integrated Frontier Sciences
Kyushu University

有川総長挨拶



新専攻の構想を熱く語る有川節夫総長



パネルディスカッションと満員の会場

講演



高山正也国立公文書館長



植松貞夫筑波大学
図書館情報メディア研究科長

パネルディスカッション



入試説明会で熱心に質問する学生たちと対応する教員



はじめに

九州大学大学院統合新領域学府長 塩次 喜代明

統合新領域学府は九州大学の第18番目の大学院として平成21年4月に設置されました。科学的な知の探求は大学院大学の使命です。統合新領域学府ではそのことを踏まえて、現代の人類社会が直面する重大な課題を高度かつ専門的な科学的な知の統合によって究明し、高度な専門人材の育成をはかることを目指しています。

「知の統合」がここでのコンセプトです。それはどのような意味をもつのでしょうか。特化した研究分野をさらに細分化しながら、科学的発見や新規な知の創造を求めようとする知の営みは、学術の進歩であり、専門的な知を極めようとする「科学的探究の遠心運動」といえるでしょう。このことによって多くの科学的な発見が生み出されています。

しかし、あまりに特化し細分化した科学分野は次第に知の交流を阻むような、先鋭さと難解さを秘めるようになります。このような負の側面は知のエントロピーと捉えることができます。

他方、現代の科学や社会が解決を求めている複合的な課題が次々に生まれています。このような課題に回答を与えるには、特化した専門的な知が単独で立ち向かうことだけでは困難です。この場合、知のエントロピーを克服して、専門的な知の交流を促し、それを統合することが有効でしょう。つまり、「科学的探究の求心運動」というべき新しい知の仕組みが重要になると考えることができます。

大学が知の統合をはかることは、課題の側から大学を再構築することを意味します。統合新領域学府はまさしく課題の側から、言い換えれば大学の出口の方から設計された大学院なのです。ちなみに「ユーザー感性学専攻」は人間の感性を生活者の立場で科学することを目指しています。また「オートモーティブサイエンス専攻」は新時代の自動車の技術や自動車社会のあり方を探求しようとするものです。

誕生する「ライブラリーサイエンス専攻」は、ユーザーの視点に立った情報の管理と提供を確保し、同時に知の創造と継承を支える新たな「場」に求められる高度な専門人材の養成を目指しています。ライブラリーはハードな施設でもなく、図書が集積された物理的な場でもありません。それは知の編集や提供さらにはその継承を通じて、知の創造を支える機能や活動をさしているのです。

統合新領域学府で学ぶことは、現代社会が求める課題に立ち向かう高度な専門人材として成長することに他なりません。統合をコンセプトにして新しい知の創造に取り組み、その成果を現実の世界で活かすことを目指すという新しい試みが、今始まろうとしています。ライブラリーサイエンス専攻の挑戦に大きな期待と激励を願うばかりです。

講演「日本におけるアーカイブズの役割

～九州大学ライブラリーサイエンス専攻に期待する～

国立公文書館長 高山 正也

皆様こんにちは。ただ今過分なご紹介をいただきました高山でございます。

現在、たまたま国立公文書館の館長職をお預かりしているわけですが、今ご紹介をいただきましたように、私はアーカイブズ、公文書館といいますが、この世界に入りましてまだ5年少々の経験しかございません。それに先立つ40年近くを図書館と関わっておりました。具体的に言いますと、7年間の図書館の実務経験とその後30年間、慶應義塾大学の図書館情報学専攻の方で教鞭を執っておりました。本日この場に呼んでいただきましたのも、アーカイブズについて話をすることが主眼であったかと思いますが、これは私にとってはちょっと荷が重い話でございます。そこで、長年やっておりました図書館とアーカイブズを比較することによって、その両方の特質のようなものをお汲み取りいただければ幸い、というふうに考えまして、自分の能力をも顧みずこの晴れがましい席に立たせていただいた次第です。

それでは本題に入らせていただきます。

まず最初に、この度、九州大学にライブラリーサイエンス専攻が開設されましたことについて、本当におめでとうございますと申し上げたいと思います。そのライブラリーサイエンスの末席に連なる者の一人といたしまして、私も本専攻の今後のご発展を大いに期待させていただきたいと思っております。同時にもう一つ、ライブラリーサイエンス専攻を開設されるために、関係の先生方が大変ご苦労された由、漏れ承っております。そして、それがようやく実を結んだということで、本当にご苦労さまでしたと労いを兼ねて、お祝いを申し上げたいと思います。

先生方がなぜご苦労をされなければならなかったのか、ということを少々お考えいただきたいと思えます。これはもう、ここに図書館関係の方がたくさんお集りですから改めて言うまでもないことかも知れませんが、我が国の教育行政のみならず社会全体の中で、図書館が正当に評価されていないからではないかと思うわけです。日本で図書館は非常に低い評価、不当に低い評価しか与えられていない、というふうに私はかねてより思っております。

「それは、けしからん」ということは幾ら言ってもいいわけですが、けしからんと言うばかりでは仕方がないのであって、こういう状況を正していかなければいけないわけです。なぜこういう低い評価になるのかということを考える必要があるのではないかと思っております。

その理由の一つは、ライブラリーサイエンスは学問としての歴史が浅いということが考えられます。かねて、私も若い頃、そのようなことを言っておりました。ところが今や日本の大学で図書館情報学、即ちライブラリーサイエンスが本格的に教育され始めてから半世紀以上経っています。もっと言いますと、実際に「図書館学」という名称の講座そのものが帝国大学で講義され始めたのはさらに古く、既に100年近い、1世紀近い時間が経っているわけです。にもかかわらず、評価の低い状態が変わらないのは一体どういうことなのか、ということであります。

その理由の一つとして考えられますのは、他の学術分野に、ちょっと言葉が悪いのですが、従属しているということがあるかもしれません。先ほど来の先生方のお話にありましたように、図書館がなかったならば学術研究など成り立たない、教育も成り立たない。それは皆分かっているわけです。けれど、その学術研究のディシプリン、それが医学であれ、物理学であれ、化学であれ、法律学であれ、経済学であれ、その中に従属する形で図書館が入っているわけですね。具体的なことを言うと、「何々学部資料室」というのがあって、そこが非常に大きな力を持っている。九州大学ではそうではないかも知れませんが…。九州大学のことは私は分かりませんから言えませんが、「某帝国大学」と敢えて名前は伏し

ておきますが、そこは総合図書館は全然力がなくて、学部資料室が隠然とした力を持っている。これは伝統的な学術研究領域に図書館が従属してしまっている証でもあります。

それからもう一つ考えられるのが、サービスのあり方です。この辺のところを私は、九州大学で新しい分野を開拓していただけることを期待したいと思います。サービス、即ち情報提供サービスということですが、このサービスにユーザーから見てどれだけの付加価値が付けられるか、そここのところが非常に問題であると考えられるわけです。

今の図書館のサービスのやり方は、要するに「適合文献を提供する」というやり方ですね。このやり方に付加価値が付いていないとは、私は申しません。付加価値は十分付いていると思います。付加価値が付いているから“適合”なんですから。しかし、通常の行政分野あるいは一般社会の素人さんがご覧になってどうかというと、図書館員がよく皮肉られるように「図書館員っていいですね。本を右から左へ手渡すだけでお給料がもらえるんですね」と、こういう話になるわけです。ただ単独の適合文献を提供するだけのサービスで、今後、我が国の社会の中で、情報サービスを提供している、高度な知的専門職であるということが言えるかどうか。そここのところに非常に大きな問題があるのだろう、というふうに私は思っています。

いわゆる実証的な専門職サービスというのが、日本の社会の中で定着しにくい、認めてもらいにくいところがあるわけです。これにどう対応したらいいのだろうか、ということを考えてと思います。モノを提供するのではなく、ユーザーの望んでいる情報をというお話を先ほど来、富浦先生も盛んにしておりましたが、そういう情報を、どのようにして提供すればよいのかということ。それが本日の私の話の中心であるとお考えいただければと思います。

ここに示した図 (PPT, no 3) は、九州大学の「統合新領域」であります。ライブラリーサイエンス専攻と、あと2つの専攻が示されています。この中で「ライブラリーサイエンス」というものをどのように捉えるかということ、この図のようになります (PPT, no 4)。これはきちんとした形のものではありません。ライブラリーサイエンス専攻の中には「図書館情報学」的な研究分野と「アーカイブズ学」的な研究分野がある。では、その「図書館情報学」とは、「アーカイブズ学」とはなにかという話になったときに、「こういう分野もありますよ」ということであって、その内容は網羅的に全部入れているわけではありませんから、そのことを前提にしてご理解いただきたいと思いますが、こういう分野があるわけです。

この「図書館情報学」において「書誌学」と「ドキュメンテーション」だけを抜き出したのはどういうことかと言いますと、「書誌学」は言うまでもなく本そのものについて研究する学問分野であります。「図書館情報学」の中で今は余り主流ではないかも知れませんが、そういう分野は必ず必要であるということです。それから「ドキュメンテーション」というのは、先ほどの富浦先生のお話に「サブジェクトライブラリアン」という言葉が出てきましたが、その「サブジェクトライブラリアン」であることを求められるのが「ドキュメンテーション」なのです。「ドキュメンテーション」とは何かということについては、後ほどまた簡単な説明を加えたいと思います。

それから「アーカイブズ学」の方は、先ほど出ました「記録管理学」という分野のことで、「レコードマネジメント」という英語を日本語化したものです。「古文書学」という分野もを出していますが、これも先ほど「図書館情報学」で「書誌学」を出したのと同じように、伝統的なアーカイブズ学、あるいはアーカイブズ論を「古文書学」として表わさせていただきました。このように、伝統的な分野だけでなく、ちょっと新しい分野にも力点がかかっているというのが、九州大学に期待されている「ライブラリーサイエンス」ではないかと考えている次第です。

ここでいきなり結論を言っておきますが、日本におけるアーカイブズの研究教育の場として、九州大学の大学院にライブラリーサイエンス専攻が新設された。これに関連して是非お願いしたいことは、「図書館情報学」がマイナーディシプリンから脱却して欲しいし、またそれが可能だということです。

「『図書館情報学』では将来、勉強した学生さんの就職先がありません」などと行政当局から言われな

いようにしたい。「『図書館情報学』を勉強しました」という卒業生に各職場から「では是非おいでください」と言っただけのようにするためにはどうしたらよいか。また、他分野の従属から脱却したい。そのためにどういうことがありえるかということについて申しますと、例えば、「伝統的な図書館学を勉強させた卒業生を公共図書館へ就職させよう。公立の公共図書館へ就職させよう」と考えても、これは現在ほとんど無理であります。それは、「図書館情報学」を学んで司書資格を取って、公立の公共図書館へ行きたいと思っている人の能力が不足しているということではありません。採用する側が、なかなか採用に積極的になれないのです。現在の日本の国並びに自治体の行政の現状、もっと言うならば、財政の現状から考えて、就職が容易に可能になるとはとても言えません。ですから、それ以外のマーケットも開拓しなければと考えなければなりません。

また、大学図書館へどれだけ行けるかということについても、これも非常に難しいですね。今、大学という所も大変な競争状態にあります。大変失礼なことを言うようで恐縮ですが、非常に良いときに大学を辞めたなあと、私は日頃から胸をなでおろしているという状況です。あのまま大学に定年までいようとしたとしても、とても無理ではなかったかというふうに思います。そういう状況ですから、なかなか新しい人の採用は期待できません。

そこで、伝統的な図書館の分野はかなり就職が難しそうであるなら、「アーカイブズ分野を作ったのだからアーカイブズの分野はどうか。アーカイブズは公文書管理法ができるし…」という期待が生じることになるでしょう。確かに来年度（2011年度）の4月からは新しく公文書管理法が施行されます。それに基づいて、例えば福岡県ですと、ご承知の方も多いと思いますが、県内の4自治体が合同で公文書館を作ろうということをやっておられますから、そこにたくさんの方が採用されるのではないかとと思われるかも知れません。

しかし一体、日本全国で公文書館の数がどれほどあると思いますか。私は先ほど、図書館の就職市場は難しいと言いましたが、そういう公立公共図書館でさえ日本全国で3,000館以上あります。47都道府県すべてに公共図書館は揃っています。17の政令指定都市にもすべてあり、また約1,800の市町村のなかの市のレベルにもほぼ100パーセント揃っています。名前を出して悪いのですが、かの夕張市でも市立図書館を持っています。町村のなかで自分たちの図書館を持っていないところがわずかに残っている、というだけあります。

では、アーカイブズはどうかと言いますと、47都道府県のうち、なんと17の県は公文書館を持っていないのです。都道府県レベルです。政令指定都市では、17のうちわずか7つの政令指定都市しか公文書館を持っていません。国全体で、本日ただ今現在、57の自治体しかアーカイブズがないわけです。しかも、それで平均職員数を見ますと、大きい所から小さい所まで単純に平均した職員数ですが、日本の公立図書館は確か8人か9人です。これに対して公文書館は恐らく3人までいきません。1人か2人なんです。この態勢で、非現用となった公文書を主な処理対象とする公文書館は運営されているんです。そんな職域が新卒者のマーケットとして期待することができるのでしょうか。これはもう、ほとんど無理であるということになります。

そこで期待されているのが、現用文書を対象とする「記録管理学」です。これは何かと言うと、公立の機関もビジネスの世界も、日本全国には至る所に公的な、あるいは私的なオフィスがあるわけで、オフィスがあればそのすべての場所で記録管理業務が行われているわけです。この九州大学のキャンパスから見渡しても沢山のオフィスがありますね。それをマーケットに取り込もうということに他ならないわけです。ですから、これが九州大学の一つの目玉になりうるということなのです。

ここに書いてありますように、「記録管理学」というのはそういう現用文書の管理を対象とする分野なのですが、これに本格的に取り組んでいる大学は、まだ日本全国で一つもありません。今から20年ほど前に、埼玉県の新設の私立大学である駿河台大学という所でちょっとやりかけてみたことはみたのですが、あまり上手くいきませんでした。なぜ上手くいかなかったかということ、先ほどサブジェクトライブラリアンのところでちらっとお話が出ましたが、いろんな素養、経験、知識を持っていて相当有能な人でなければ、この「記録管理」はできないわけです。新設の私立大学では無理だということなのです。や

は歴史と伝統のある、九州帝大以来の歴史と伝統を持っている九州大学で、しかも大学院ならば院生としての学生は学部卒業者としてまた、人によっては社会経験も含めて持っているので、現用文書の管理も可能であろうと私は思います。ですから、九州大学にはこの「記録管理学」のルーツ校になっていただきたいのです。「日本における『記録管理学』は、九州大学がルーツなんだよ」ということにぜひなっていただきたいと期待しております (PPT, no 5)。

このようなことを申し上げるのは、私の経験に基づいてのことです。ご承知の方も多いと思いますが、「図書館情報学」では慶應義塾大学の「図書館情報学専攻」が我が国における「図書館情報学」のルーツ校であると、私どもが自負しているからでありまして、そうしたルーツ校であることの恩恵を非常に享受していると感じているからなのです。経済学では「創業者利潤」という概念がありますが、やはり最初に手掛けますと、そのベネフィットは非常に大きいものがあるわけです。ですから是非、ルーツ校になっていただきたいとしたいと思います。

と同時に、九州大学は福岡・博多の地にあるわけですから“東アジアの記録管理学の拠点”になっていただきたいと思っております。これはどういうことかと言いますと、単に、福岡、あるいは博多の街が東アジアの拠点都市だと言っているからそれに合わせた発想で言っている、ということではないのです。意外と知られていないことですが、「記録管理学」というのは、他の諸科学と異なりまして、その中心が現在どこにあるかと言いますと、西ヨーロッパでも北米でもありません。オーストラリアのモナシユ大学という大学が、その中心なのです。記録管理学の国際標準で ISO15489 というのがありますが、これはオーストラリアの記録管理をベースにして作られているわけです。

来年11月に、アーカイブズ関係の国際機関である ICA (International Council on Archives) の東アジア部会を東京で開きます。そのときに、西太平洋地域の分科会の代表者を呼ぼうということになっています。その分科会では、大変立派な教育訓練マニュアルをいろいろ作っているという話を聞いているからです。何が言いたいかと言いますと、つまり、「記録管理学」というのは地球規模で考えますと西太平洋が世界の中心になっているということなのです。それを考えますと、福岡は日本を代表して「記録管理学」をやっていただくのに、地理的にも大変良い位置にあるわけですから、是非九州大学にお願いしたいと考えているわけです。

ところで、図書館とアーカイブズを一緒に考えるということはいかかなものかと思っていらっしゃる方もおられるのではないかと思います。これは本来大変強い類縁性を持っているということをおきたいと思えます。

言うまでもないのですが、図書館も文書館も“蓄積検索型”の情報サービスであります。敢えて言うなら、博物館もそうかも知れません。ですから「蓄積検索情報サービス」ということをベースにしまして、最近では“MLA の連携”という動きがあります。M はミュージアム、L はライブラリー、A はアーカイブズで、これらをお互い連携させて一体として活動してもらおう。それが社会の文化の発展に大いに貢献するのではないかと、いう動きです。デジタル化をどんどん進めていきますとミュージアムの世界も取り込むことができ、九州大学としてはさらに大きな内容を持った専攻に発展する可能性が出てくるということでもあります。

この「蓄積検索型の情報サービス」での特徴は、「情報そのものを直接管理するのではなく、記録媒体の形にして、管理すること」です。「記録媒体」というところでは、“原本を扱う”というケースと“複製物を扱う”というケースがあります。「複製物」とは何かと言うと、出版物です。印刷されるということは同じ物がたくさんできるわけですから。それに対してアーカイブズは、手書きの文書に代表されますが、こういった物は「原本」であります。アーカイブズは原本が中心になり、図書館は複製物、出版物が中心になる。そういう違いがあるわけです。

管理の業務内容とプロセスはだいたい似ています。受入れ収集があって、組織化すなわち集めた資料群に秩序を与える。それからサービスがある。保存をする。そうして次世代へ伝承していくということです。

歴史的に見ましても、実はこの二つは非常に類縁性が強いわけです。例えば、私どものところで若い

職員が「アーカイブズって面白いですね。本格的に勉強したいからアメリカのアーカイブズ学科のある大学へ見学に行きたい」などとよく言うのですが、それは何も知らない人の言う言葉です。実際にアメリカへ行って「アーカイブズスクールってありますか？」と聞いたら、バカにされてしまいます。アーカイブズ学は皆、ライブラリースクールで研究教育されているわけです。何を意味するかと言いますと、アーカイブズとライブラリーが分かれたのは、通俗的な理解として、ゲーテンベルグ以降であると考えればいいわけです。印刷物、複製物が大量に出るようになって、それを扱う図書館の世界と、オリジナルを扱うアーカイブズの世界という分け方が出てくるということです。以下に、その辺のところを少し整理してみました。

図書館というのは複製物を扱う。その出版物に込められている情報は、出版物が通常、図書館、あるいはその図書館を設置している組織の外側で作られます。そして、その出版物というのは、大勢の人に読んでもらうことが前提になっている、公開が前提になって、出版社での編集がなされ、それを通過したものは不特定多数の人への情報伝達が想定されているということです。ですから出版され、図書館に選択受け入れられた出版物を閲覧段階でその可否を審査するのは、検閲ということで排除されます。図書館サービスというのは“言論の自由を保障する”という意味から、検閲という問題で制約がかかってはいけないということで図書館サービスが昔から行われている。公開が前提ですから図書館サービスで秘密侵害が行われるという社会的な疑念は持たれていないわけです。

一方、アーカイブズの方は、業務文書であります。原本であります。当然のことながら、組織内で、非公開で作られます。非公開で作られているものが、例のウィキリークスのような形で出て来たら大変なことになるわけです。とにかく非公開が前提にされている。けれども民主主義社会においては、主権者が必要に応じて見ることができなければいけないということになります。文書に示された国や組織の行為は国民や顧客に対する説明責任を伴うこととなりますので、先ほど言いました、来年の4月から施行されます「公文書管理法」では、(公)文書の利用が“利用請求権”という形で、国民が生まれながらにして有する一つの権利として認められるわけです。従って、公立のアーカイブスが利用請求権を突き付けられたときに、それに対しては「行政処分」として対応し、公開する義務を果していかなばならないわけです。

それに対して図書館サービスについては、図書館法や社会教育法のどこをひっくり返しても、「国民に、図書館が保有するところの公有財産である図書を、閲覧提供に供さなければいけない」とは、一言も書いてないのです。ということはどういうことかと言いますと、例えば公共図書館の世界でごくあたり前にやられているサービスがあります。それは、「自分は、本屋で購入して読むのはイヤだ。図書館で借りてタダで読みたいからこれこれの本を手に入れてほしい」という利用者の要求に応えるサービスで、多くの自治体ではこれができます。図書館の方ではこれを“リクエストサービス”と称して「どうぞリクエストしてください」などと言っているわけですが、これは誠にけしからんことです。公的な機関の予算執行権を放棄して、地域の特定住民の要求に応じているわけですから。あるいは、公共図書館の場合は、利用者を設置している自治体の住民に限定しておりませんから、誰でも要求することができるということになるわけです。

言ってみれば図書館サービスは、21世紀の現在にあって、徳川時代の“お上のお慈悲”の考え方がいまだに生きているという状況であります。このことを図書館関係者に言いますと「そうですねえ」と言うんです。で「そうですねえでは、すまないでしょう」と言うと、「1960年代頃に一度文部省で問題になったとき、局長レベルで『ともかく法律上は何も規定はしていないけれども、請求が出たらそれに可能な限り応えなさい』という通達が出たのだ」と言うんです。そこで「その通達を見せてください」と言いましたら「そんな文書は保存されていません」ということで、アーカイブズの未整備状況がそこでバレてしまったという、笑い話のような話があるのですが...

今まで申し上げたようなことを、まとめておきました (PPT, nos 6, 7, 8)。図書館と公文書館では出版物と業務文書の違いがある。それから、公文書館は民主主義社会の存立の基盤になっている。要するに主権者が知るために、主権者の主権行使のための情報の提供の基盤になっている、ということです。

図書館の準拠法としては、「図書館法」とか「学校図書館法」がありますが、公文書館は先ほど言いました「公文書管理法」とか、あるいは「公文書館法」というものがあります。私が現在おります国立公文書館には「国立公文書館法」という個別の設置法もありますが、大きくは「公文書管理法」と「公文書館法」だと思います。先ほど言いました「利用請求権」というのは、「公文書管理法」の第16条で「国民の請求権」として規定されていることになるわけです。

ちょっときつい言い方をしますと、公文書館のあるなしや、図書館の在り方は自治体の民度に依るところがあります。図書館のリクエストサービスにしたところで、公的な財源を特定の私的な目的に使ってはいけないということで自主的、自律的規制がかかればいいのですが、そうではなく「図書館でタダで本が読めればいいや」という発想に住民がなってしまう、その住民の要求に無定見に自治体や図書館が従うということになりますと、そういう発想は非常に通俗的なレベルで、コミュニティへ浸透する駆動力になってしまう。そのような次元での図書館や公文書館は、求められている主権者への情報提供機関とは違うということです。

もう一つ図書館の特徴を指摘しておきますと、図書館の蔵書というのは、その国の「納本規定」で、「出版物はすべて納本図書館に納入される」ということで網羅的な収集が行われることが前提になります。これに対してアーカイブズは、もしそのようなことをやりましたら巨大な紙くず箱が出来上がるわけですから、作成された文書の中で選別を繰り返して、ごく一部の歴史的に価値のある「歴史的公文書」と呼ばれる文書だけが公文書館に入ることになります。どのくらい入るのかといいますと、日本の場合は、現在1パーセント前後です。世の中に存在した、すなわち国の機関が作成した膨大な文書の1パーセント前後は国立公文書館に入るということです。これに対してアメリカのNARA (National Archives and Records Administration、アメリカ国立公文書館)では、2～3パーセントだということです。もっとも絶対量の桁が違うわけですが...。我々ももう少しカバー率を上げていかなければいけないのですが、やはり捨てられるものは非常にたくさんあるということでもあります。以上、図書館とアーカイブズの比較をさせていただきました。

次に「ライブラリーサイエンス」の方に話を移したいと思います。ここで問題にしたいのは「サイエンス」ということです。まず、「サイエンス」なのか、「スタディズ」なのかが問題になります。いずれにしる観念科学ではなくて「実証科学」ということになると思います。実際に「ライブラリーサイエンス」というのは、現実の社会に存在する図書館とか資料センターというようなものの実在を前提にして、そこに生じてくるさまざまな課題をどう解決していったらいいのかとか、こうすることによって、より効率性の高い解決策が得られるのではないかとすることを研究する学問ではないかと、私は勝手に考えております。(私ごときが何か言ってもそれに拘っていただく必要は全くないのですが...)

一つは、「証拠性」ということが大きな問題になってきます。九州大学は「ライブラリーサイエンス」とされました。「サイエンス」ですから、自然科学に代表されるようにその理論は証拠によって裏付けられることが必然となるはずで、「証拠」としては、文書記録がもちろぬ証拠に相当します。この文書記録というのは、これだけを対象にして考えた場合には、先ほどお話ししました「書誌学」とか「記録管理学」が大きな研究領域になってきます。もう一つ、冒頭にちらっと言いましたように、文書や記録そのものを提供するというでいいのだろうか。むしろ、ユーザーが求めているのは、この中身ではないのか。この中に何が書かれているのか、ということではないのかということです。だからこそサブジェクトライブラリアンが必要であるという話になっていたはずであります。そのところが、もう一つ突き破らなければいけないところだと思うわけです。どうやって突き破るかは、後にまわさせていただきますが。

「図書館情報学」とか「アーカイブズ学」、あるいは情報史とか、こういったところで扱うのは組織です。図書館という組織、アーカイブズという組織です。歴史学の伝統的なアーカイブズ学はちょっと置いておきまして、九州大学がおやりになろうとしているような記録管理にまでウイングを拡げた「アーカイブズ学」ですと、組織そのものです。会社であったり、役所であったり、公的な組織であったり、民間のビジネス的なアーカイブズであったり。それから、情報史というのは国というレベルで、そ

う組織をベースに置いているわけです。

話を戻しまして、私は「ライブラリーサイエンス」の「サイエンス」ということに拘っています。もともとは私も「サイエンス」でいいのではないかと思っておりました。あるいは、これは単数ですが、「ライブラリーサイエンスィーズ」と複数にすればいいのかなともちょっと思うのですが。というのは、図書館と言ってもいろんなタイプがあって、アーカイブズにもいろいろあるわけですから複数ののかな、と。それはともかく「サイエンス」ですが、私がカリフォルニア大学へ留学したときのファカルティアソシエート、彼は英国人でオクスフォードの歴史学の出身でしたが、私に「“サイエンス”といえば自然科学である。自分はそれに拘る」と言っていました。カリフォルニア大学と言えばUCバークレーとUCLA両方に図書館学校がありまして、バークレーの方は「ライブラリー&インフォメーションスタディ」、UCLAの方は「ライブラリー&インフォメーションサイエンス」でした。UCLAにはロバート・ヘイズという大変有名な教授がおられました。ずいぶん前にリタイアされましたから既にこの世にはいらっやらないかも知れませんが。で、私のファカルティアソシエートのマイケル・バックランドは、「UCLAにはヘイズがいるからね。彼はもともとエンジニアだから平気でサイエンスと言うんだ。」ということをしていました。そして「『図書館学』が純然たる自然科学であるのはおかしいのではないかと。その辺のところを今後、いろいろとご議論していただくと面白いと思います。特にお酒を飲みながらご議論していただくにはよいテーマではないかと思っております。少し脱線しましたので、本筋に戻します。

次に、個別の情報とか知識という問題との関係を少し見ておきたいと思えます。図書館というのは出版物を介して外部情報を扱い、アーカイブズは内部情報を扱っている。こういうことになるわけですし、これは既に申し上げました。これはいずれも記録情報であって、野中郁次郎先生流の表現を借りれば「形式知」ということになります。「形式知」に対しては「暗黙知」があって、これがまた2つに分かれるということになってくるわけでありませう。

これはどういうことかと言いますと、個人の中でさまざまな体験あるいは思索があって、それが集まり、グループでいろいろと思索、コミュニケーションが行われて、その結果「ある表現をした方がよい」となったり、ディスカッションするために、個人の体験や思索の結果、あるいは精神的な活動の結果を表現して伝える。これがずっと集まって、統合されていきますと、体系化されて、知識としての形態が出来上がってくるわけです。そうしてある一つの学問研究領域になる。というような知識生成のプロセスを辿ることになるのだと思えます。これを野中先生は、有名なセキ (SECI) モデルというもので、こういう形でまとめられているわけです (PPT, nos 11, 12)。

これは「個人が形式知を暗黙知に変換する」。要するに、我々が読書をしてある知識を得ていく、学習をして知的レベルを高めていくというのは、この内面化の段階である。そういう暗黙知を持っている人たちが集まって、例えば学会で、いろいろディスカッションをする。そして、ディスカッションの結果を記録の形で表現化する。そこでは断片的な知識の表現が出来上がってくるかも知れませんが、それを一つの体系化した知識としてまとめるということです。その体系化された知識をまた個人が読むことになり、そのスパイラルがずっと続いていくことで知識が深化する。こういうセキモデルを、野中先生が提唱しておられます。これができる場として、図書館とかアーカイブズがあるということになるかと思えます (PPT, no 13)。

それから、この辺のところは飛ばしていきますが、一つだけ皆さん方に見ておいていただきたいのは、インフォメーションというのは、データ、ドキュメント、インテリジェンスというレベルがあるということ (PPT, no 14)。そして情報管理を高度化していかなければいけないということです。文書管理とか、文献管理とか、出版物管理とかいうのを止めて、全部をひっくるめて「情報管理」という曖昧な言葉にしました。これがこういう非常に大きなプロセスを包含するであろうということになるわけです (PPT, no 16)。少し階層的に考えますと、「図書館情報学」というのがあって、「専門図書館論」「ドキュメンテーション論」というのがあって、その延長線上に「アーカイブズ学」がある。これは先ほど言ったことを立体的に見たことになるわけです (PPT, no 17)。「図書館情報学」 (PPT, no 18)。これは後

で植松先生にお願いすることにします。

図書館、文書館の役割には記録の集積とかいろいろあるのですが、要するに単独文献を提供することになったとき、つまり、アクセスという問題を考えるときに、我々はかなり限定的なアクセスの段階に留まっているのではないかということを私は言いたいのです (PPT, no 19)。

一つは、その個別文献を管理していく図書館の段階、あるいはアーカイブズの場合ですと、資料の構造がありまして、本文のレベルとかシリーズのレベルとかファイルのレベルとか、それから個別の一枚一枚の断片的なアイテムのレベルというように階層分けがされますが、普通の図書館の文献提供サービスでは指示的、書誌的なアクセスとして、目録のレベルで書誌を作ったり、索引をつけたりというようなこのレベルと、物的なアクセス、これはアベイラビリティですね。文献そのもの、文書そのものが利用者の手元に提供するというこのレベルで終わっているのです。

しかし、アクセスにはまだ言語的なアクセスもあります。この場合、単に現在の意味での翻訳だけでなく、同じ日本語でも翻字という分野があります。それから概念的なアクセスで、解題を付けたり文献展望を作ったりというようなサービスをやらなければいけない。この部分がまだ日本では十分できていないのです。教育もできていないし、人材も育てていないし、サービスも社会的に不十分ということで、一つはこういう分野を十分にやっていただくということも有り得ます (PPT, no 20)。

しかし、これとは少し別の形で考えることもできるのではないかと思います。それは、図書館があってアーカイブズがあって、さらにその先に情報分析の世界があるということです。

図書館の中では一応、比喩的に、「公共図書館」と「専門図書館」を出しておきます。「公共図書館」が基本的なレベルです。“幼稚な”という意味ではありません。基本的なレベルで公共図書館があって、それで専門図書館があり、その延長線上に「記録管理学」が出てくる。あるいは「アーカイブズ学」が生まれてくる。この段階は、日本全国で約200校とかという司書課程の開講大学があるわけです。ここでその職能を担う人材は教育される。アーカイブズについては現在、学習院大学が既にやっています (PPT, no 21)。

で、その先に情報分析の世界があるということになります。情報分析という前にまず情報史研究があります。要するに情報分析機関の実態を知ることです。CIA が何をやっているか、KGB が何をやっているか。そういうことをきちっと分析して国の情報政策がどうなっているかを研究することは、国家的に今、喫緊の課題になっており、国益にもかなうことです。これは日本では既に京都大学がやっております。京都大学の中西寛教授のところ「情報史研究会」があって、この課題の研究をやっています。ですから、九州大学にはここを是非やっていただきたい。このレベルを目指していただきたいと思っています。この課題は国の業務だけではなく、ビジネス関係の業務でも必要になり、その種の人材の需要は無限です。

レジメをご覧ください (PPT, nos 22, 23)。左側の「資料源」のところは文書ですね。結論が右側にありまして、その間に結論を構成する要因が展開されておりまして、それをさらに細かく展開し、それに関する情報を有している文献を見つけていくわけです。そうするといろんなことが分かります。ここにお見せするのは1936年 (昭和11年) にアメリカが日本の戦争継続能力を調べたものです (PPT, nos 24, 25, 26)。アメリカがやっただけでなく、日本も満州鉄道の調査部が、当時の支那の継戦能力をこういう形できちんと出していたわけです。そうして「日本よりも支那の方が継戦能力がある。戦争を長引かせると大変なことになる」という報告を出していました。これはよく知られていることであります。このようなことも一つ大事ではないかと考えています。

しかし、情報分析は研究分野としては面白いことなのですが、実際に大勢の卒業生が就職し、活躍する分野としては、「記録管理」かなと、思っています。「記録管理」というのは単なる文書管理、要するにファイリングという事務処理のレベルから、こういうところが新たに付け加わった分野ということになってくるわけです (PPT, no 29)。ここに示しましたように「アーカイブズ学」や「記録管理学」というのはどういう学問分野かと言えば、これもパンフレットの中にもっと細かく書かれておりますが、ここでは非常に類縁性、関係性の強い分野だけを出しておきました。歴史学、政治学、経営学、そして

情報技術、ITの世界です (PPT, no 30)。

アーカイブズはアーカイブズで、「アーカイブズ学」の非常に大きな、長い研究の歴史があります。これは資料を、歴史的な価値があるものかどうかということから判断するもので、そのための理論が幾つも出来上がっております。

これは一番最新の「記録連続体モデル」(PPT, no 32) ということで、従来は資料が出来上がって、この資料が歴史的に価値があるかどうかを見ていたのですが、資料が出来上がる段階、あるいは資料を作成する組織がどのようになっているかという段階から、我々の研究対象にしていこうというふうに変ってきております。

大事なことは、アーカイブズだとか記録管理とかは実際に役に立つのかということです。これが最終的に問いかけられる疑問だと思います。これはスコットランドの最近の資料ですが、「所属する組織についても貢献できますよ。所属する社会についても貢献できますよ」という結論がきちんと出されております (PPT, nos 34, 35)。ですから、九州大学のライブラリーサイエンス専攻へ行こうかな、どうしようかなと迷っている方は、是非とも安心をして入学していただきたいと思います。将来、大いに展望が開けるのではないかと考えております。

もう一つ大事なことは、これからは、どうしてもデジタルな技術を応用していかなければいけないということです。デジタル化することによって何が可能かと言いますと、こういう遠隔利用ができるとか、同時複数利用ができるとか、複製拡大が容易になるとか、編集が簡単になるとかというような利点が出てきます。アクセシビリティが非常に改善するわけです (PPT, no 36)。

ついでにちょっとコマーシャルをやらせていただきますと、今日本で「デジタルライブラリーとかデジタルアーカイブズとか言うけれど、やっぱり遅れているよね」と思っている人は圧倒的に多いと思います。ですが、日本は世界最先端のデジタルアーカイブズを持ち、実際に運用しているのです。このことは是非知っていただきたいと思います。それは国立公文書館の関連機関としての「アジア歴史資料センター」です。ここが世界最大と言っていると思いますが、2,300万を超える画像を入れたアーカイブズを持っており、それに年間60万回を超えるアクセスが行われています。どういうものかと言いますと、1945年までの大日本帝国政府の、東アジア諸国との間で関連があった公文書です。これが全部見られるのです。何の制約もなく、無料で。しかも日本語だけでなく英語、中国語、韓国語に翻訳されています。

繰り返しになりますが、ぜひ九州大学のライブラリーサイエンス専攻では、マイナーディシプリンから脱却して、「蓄積検索型情報サービス」を確立していただきたい。「記録管理学」を確立して、日本のルーツ校としてのベネフィットを大いに享受していただければと考えている次第です。ご静聴ありがとうございました。

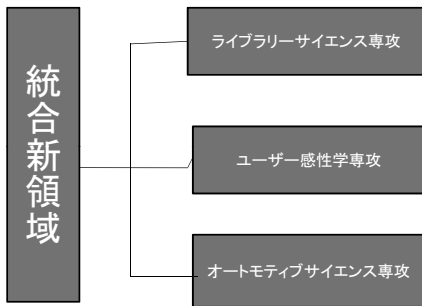
《日本におけるアーカイブズの役割》
図書館情報学とアーカイブズ学：
情報蓄積検索サービスを支える理論
九州大学ライブラリーサイエンス専攻に期待する

(独)国立公文書館 館長
慶應義塾大学名誉教授
高山 正也

NO 1

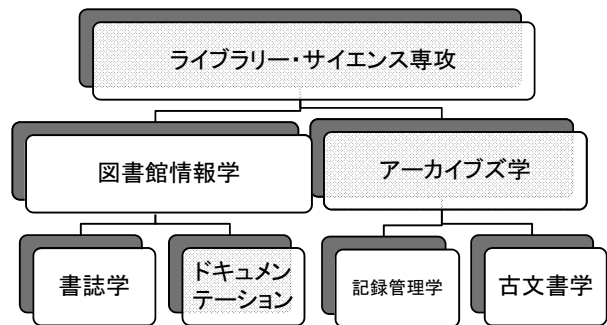
1. 九州大学における「ライブラリー・サイエンス」の構成

NO 2



NO 3

文書記録による 情報管理学の領域



NO 4

日本におけるアーカイブズの役割

《九州大学ライブラリーサイエンスに期待する》

- マイナー・ディシプリンからの脱却
- 他学分野の従属からの脱却
- ↓
- 記録管理学 (Records Management) の確立
- 九州大学の専攻の目標: 九大への期待
 - * 記録管理学のルーツ校となる
 - * 東アジアの記録管理学の拠点校

NO 5

図書館と文書館の類縁性

- 蓄積・検索型の情報サービス
 - ＜特徴＞; 人類の知識・経験の累積拠点
 - * 情報の管理は記録媒体の管理で行う
 - * 記録媒体: 原本と複製物
 - * 管理; 受入・収集、組織化、提供・利用保存
 - * 歴史的親近性; 文化の進展で分化

NO 6

図書館と文書館の特性

- 図書館 (Library):
 - * 複製物 (出版物)
 - * 組織外作成 (公開前提)
 - * 図書館サービス ⇔ 検閲 (言論の自由)
- 文書館 (Archives):
 - * 原本 (業務文書)
 - * 組織内作成 (非公開前提)
 - * 公文書の利用 (請求権) ⇔ 個人情報保護

NO 7

図書館と文書館の違い

- | 図書館 | 文書館 |
|-----------------------------|---|
| • 主な所蔵資料: 出版物 | • 主な所蔵資料: 業務文書 |
| • 目的: 社会教育・学校教育等 | • 目的: 民主社会成立の基盤 |
| • 準拠法: 図書館法、学校図書館法等 | • 準拠法: 公文書管理法 |
| • 提供サービスの根拠: 行政サービスとして便宜供与? | • 提供サービスの根拠: 国民の公文書利用請求権 (公文書管理法第16条) による行政処分 |
| • 個人的利益によるコミュニティーへの浸透 | • 地域主権確立という公益性認識による設置 |
| • 出版物の網羅的収集 | • 文書類の選択的収集 |

NO 8

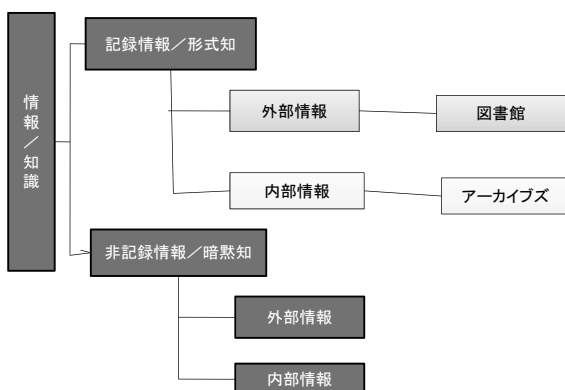
2. 実証科学としての図書館情報学とアーカイブズ学

実証的科学としてのライブラリーサイエンス

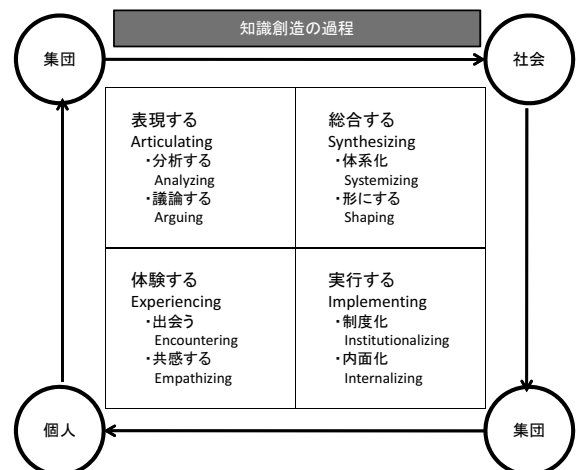
- 実証的科学とは:
 - 実際の確かな証拠に基づき研究をする科学
 - 文書・記録、組織を扱う ⇒ 社会科学
- * 文書・記録: 書誌学、記録管理学
- * 組織: 図書館情報学、アーカイブズ学、情報史
- 科学: 仮説・実験・理論形成 = Science (社会科学 = Studies)

NO 9

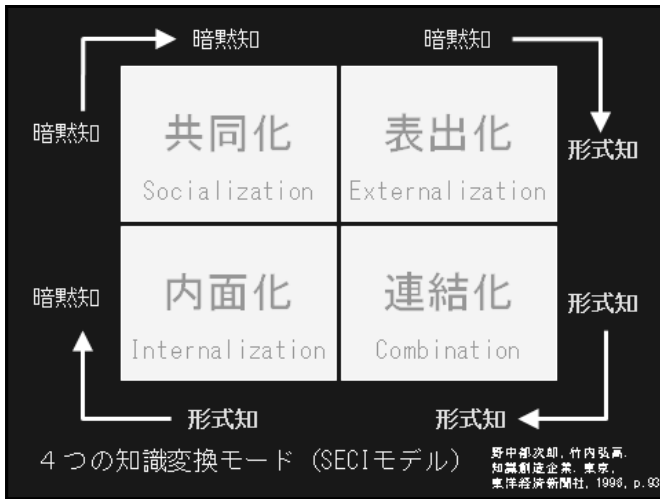
NO 10



NO 11



NO 12



NO 13

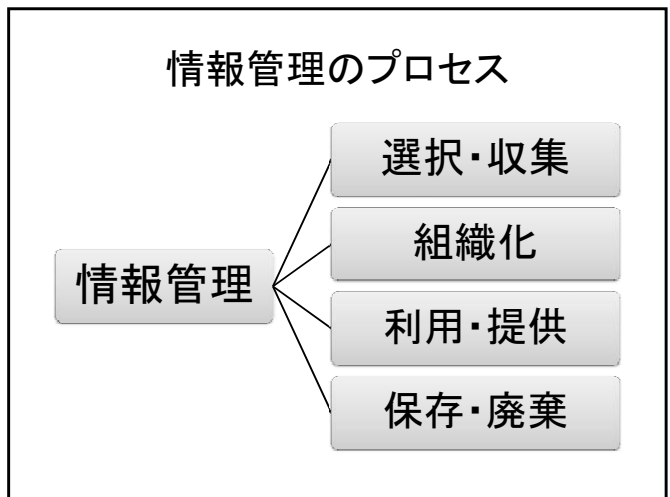
知識・経験の累積から文化へ

- 精神的・肉体的営為(思索・研究・業務)
- 暗黙知の獲得・集積 ⇒ 形式知
- 形式知の集積 ⇒ 図書館・文書館
→ 知・情報の創造
情報; Information, ⇒ Data/Document
Intelligence

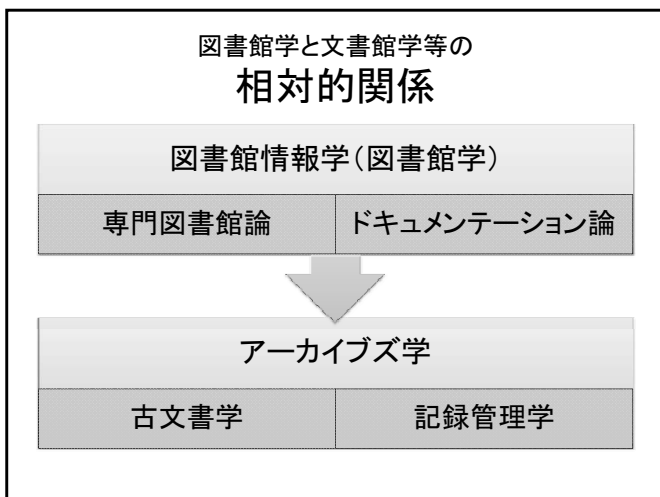
NO 14

3. 情報管理の高度化プロセス

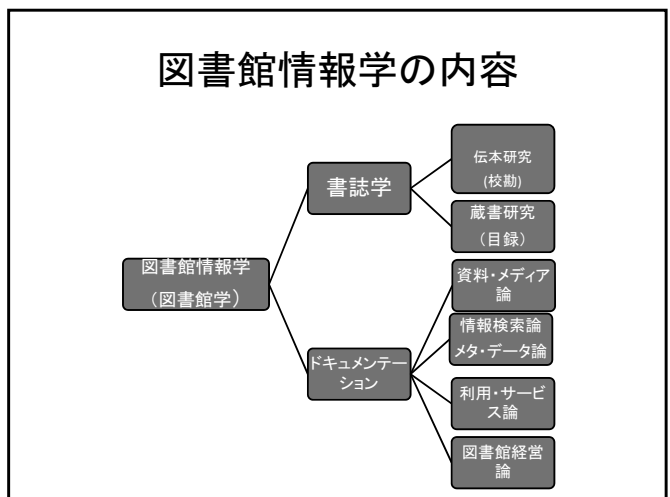
NO 15



NO 16



NO 17



NO 18

図書館・文書館の役割

- 記録の集積の効用
↓
- 社会制度としての図書館・文書館
形式知(記録)の集積拠点
- 個人の経験・思索⇒コミュニケーション・交流
⇒新たな知の創造⇒文化の創造⇒権力の基盤
⇒ 集団への帰属意識の涵養

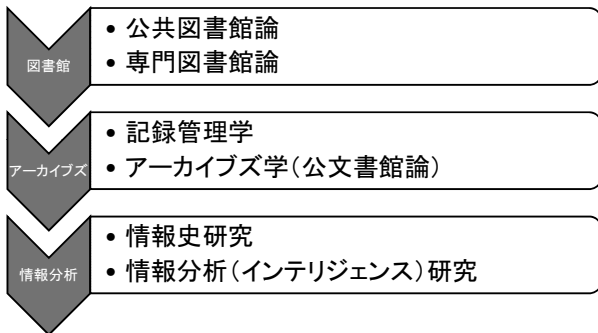
NO 19

検索サービスの深化

- [情報提供サービスの高度化]
- 指示(書誌)的アクセス ⇒ 目録・書誌
- 物的アクセス ⇒ 資料の閲覧・貸し出し
↑(図書館・文書館)
=====
- 言語的アクセス ⇒ 翻字・翻訳
- 概念的アクセス ⇒ 解題・文献展望(Review)

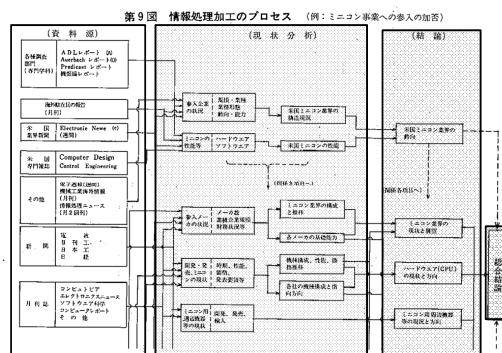
NO 20

情報管理の高度化プロセス



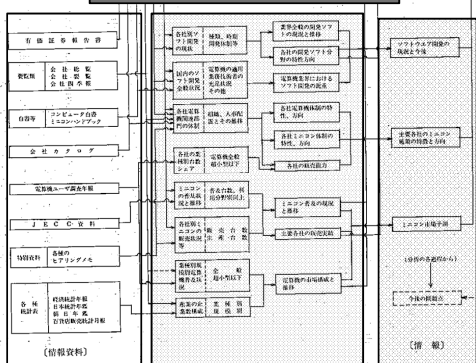
NO 21

情報分析の一事例(その1)



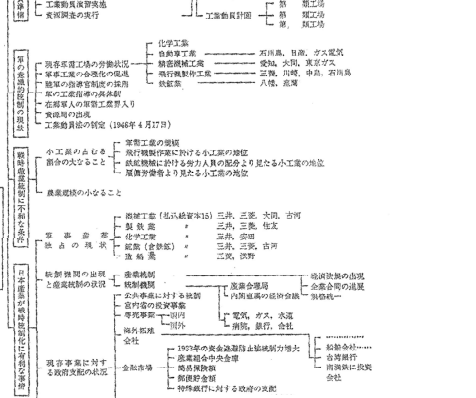
NO 22

情報分析の一事例(その2)

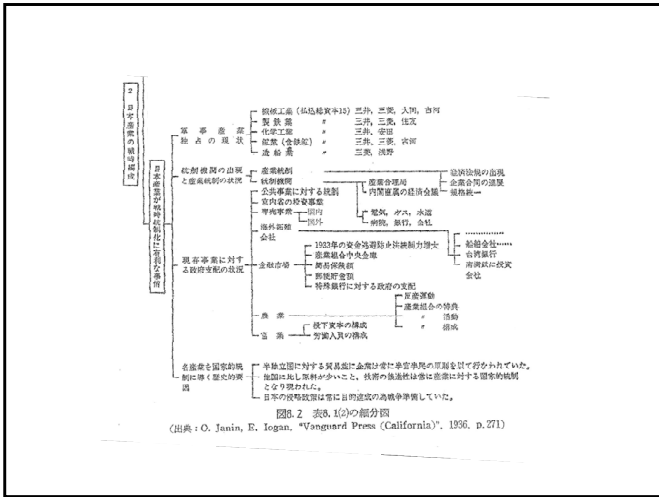


NO 23

情報分析の一事例(その3)



NO 24



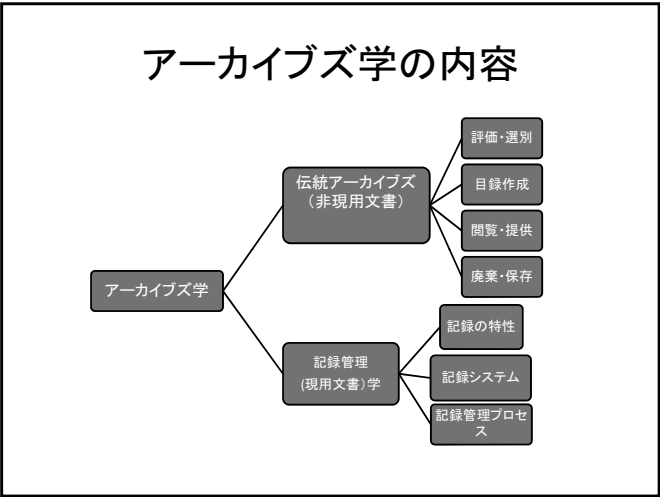
NO 25

<p>1 日本の国力増強の方向(要約)</p> <p>(1) 日本の国力増強政策</p> <p>a. 兵力増強 b. 軍備品質問題</p> <p>c. 戦費 d. 非核政策</p> <p>(2) 日本経済の概況</p> <p>a. 日本経済の増進政策に資する諸問題</p> <p>(3) 日本経済の概況</p> <p>a. 日本経済の増進政策に資する諸問題</p> <p>(4) 日本経済の概況</p> <p>a. 日本経済の増進政策に資する諸問題</p> <p>(5) 日本経済の概況</p> <p>a. 日本経済の増進政策に資する諸問題</p>	<p>(6) 日本経済の概況</p> <p>a. 日本経済の増進政策に資する諸問題</p> <p>(7) 日本経済の概況</p> <p>a. 日本経済の増進政策に資する諸問題</p> <p>(8) 日本経済の概況</p> <p>a. 日本経済の増進政策に資する諸問題</p> <p>(9) 日本経済の概況</p> <p>a. 日本経済の増進政策に資する諸問題</p> <p>(10) 日本経済の概況</p> <p>a. 日本経済の増進政策に資する諸問題</p> <p>(11) 日本経済の概況</p> <p>a. 日本経済の増進政策に資する諸問題</p> <p>(12) 日本経済の概況</p> <p>a. 日本経済の増進政策に資する諸問題</p> <p>(13) 日本経済の概況</p> <p>a. 日本経済の増進政策に資する諸問題</p> <p>(14) 日本経済の概況</p> <p>a. 日本経済の増進政策に資する諸問題</p> <p>(15) 日本経済の概況</p> <p>a. 日本経済の増進政策に資する諸問題</p>
--	---

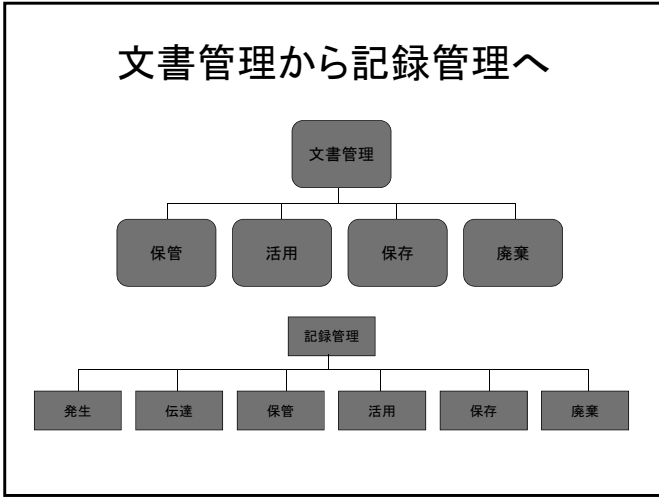
NO 26

4. アーカイブズ学の内容構成

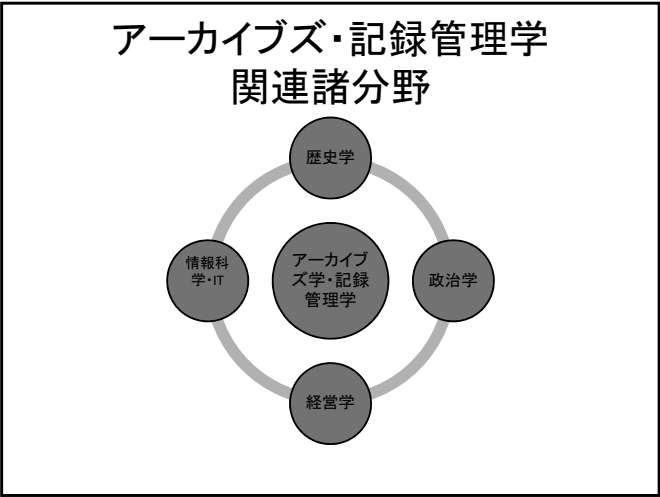
NO 27



NO 28



NO 29



NO 30

評価選別の理論

- 内容主義
 - * 一次的価値: 業務・法律上の価値
 - * 二次的価値: 情報・証拠としての価値
- 証拠主義
 - * 記録作成者が評価・選別を
 - * アーキビストは保存に徹すべし
- マクロ主義
 - * 社会や組織での記録の価値を考える
- 記録連続体論

NO 31

記録連続体モデル

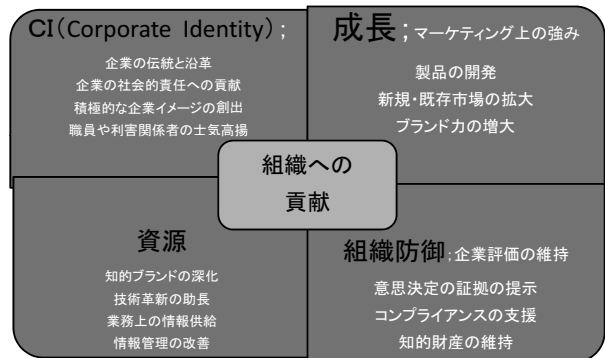


NO 32

5. アーカイブズの将来

アーカイブズ・記録管理の効用①

(by Scottish Council on Archives 資料より)

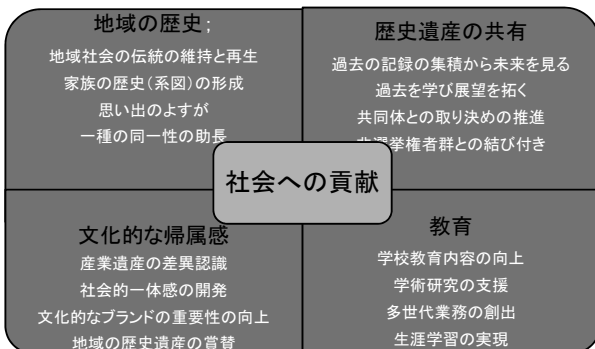


NO 33

NO 34

アーカイブズ・記録管理の効用②

(Scottish Council on Archives 資料より)



NO 35

デジタル・アーカイブズ

- Accessibilityの改善・利用促進の効果
- 遠隔利用の実現
- 同時複数利用の実現
- 複製、拡大、縮小の容易化
- 連結・編集の容易化
- 移管、廃棄の容易化
- * * 原本性の不透明化
- * * 耐久性、保存の脆弱性

NO 36

これからのアーカイブズ学

- 記録連続体モデルの下で:
管理(評価選別)権:作成者 ⇒ 利用者
記録の価値:組織活動と記録の関係
- 組織の説明責任:
組織行動・意思決定と記録との関係
- 文書館:
歴史文書閲覧場所⇒説明責任遂行
権力の源泉、アイデンティティ確立の場

NO 37

アーカイブズ学の学生

- 志願者=図書館学
歴史学(政治史、法制史、経済史、
文学史等を含む)
- 卒業後の進路:アーカイブズ・(公)文書館
専門図書館
企業史料室(社史編纂)
事務管理専門職
情報分析職

NO 38

日本におけるアーカイブズの役割

《九州大学ライブラリーサイエンスに期待する》

- マイナー・ディシプリンからの脱却
- 蓄積・検索型情報サービス学の確立
↓
- 記録管理学(Records Management)の確立
- 九州大学の新専攻の目標:九大への期待
 - * 記録管理学のルーツ校となる
 - * 東アジアの記録管理学の拠点校

NO 39

ご静聴有難うございました。
今後ライブラリー・サイエンス
専攻をご支援ください

(独)国立公文書館 館長
慶應義塾大学名誉教授
高山 正也

NO 40

講演「図書館情報学の未来

～九州大学の新専攻に期待する～

筑波大学大学院図書館情報メディア研究科長 植松 貞夫

皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました植松でございます。九州大学の大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻の設置認可、まことにめでとうございます。

「知の創造、継承活動を支える場としてのライブラリーを科学し、ユーザーにとって真に意義のある情報の管理・提供を実現する人材を養成する」を目的にされる新たな大学院の出現は、本領域にかかる教育研究組織の拡大であり、同業他社として大いに歓迎するところであります。今後、教育研究の質の向上に向けて、連携、協力を図っていきたいと考えております。

しかし、高山先生のお話にもありましたように、図書館情報学分野はマイナーディシプリンである、他分野への従属状況にある、あるいは卒業生のマーケットは狭いということも現実であり、「永らくこの分野に関わりながら何をしているんだ」という視線をビシビシと感じながら伺っておりました。

私たちの組織は、「図書館情報学」に関しては世界最大規模の教育組織でありまして、ご紹介いただきましたように「既存の図書館情報学」を教育研究しております。本日の標題は、「図書館情報学がこれからどういう方向に進むべきか」ですが、九州大学の方々に「こういう方向に進んでほしい」と申し上げる立場ではございませんので、我々の組織ではどう考えているかをお話ししたいと思います。

そのために、図書館学とか図書館情報学がどのように発展してきたかを概観するとともに、時代の波に流されつつ、あるいは時代の要請に対応しながら変遷してきた我々の組織がどのような道筋を辿ってきたか、現状がどうなっているか、そして、将来の方向としてどういうことを考えているかの順でお話ししたいと思います。

まず、「図書館学」から「図書館情報学」に、どう変わってきたか、その次は、という流れについてお話ししたいと思います。

そもそも「図書館学」という言葉が最初に使われたのは1808年とされています。ミュンヘンの宮廷図書館司書のマルティン・シュレティンガーが、『図書館学全教程試論』、すなわち「図書館学のために何を教えるべきか」という試みの論を著しまして、その中で「図書館学というものは、図書館の目的に合わせた整備に必要なあらゆる知識と技術の総体である」と定義しています。簡単に言いますと、主に図書の整理法であり、「利用者の求めに応じて素早く、目的の図書を取り出せるためにはどうしたらよいかを教育するのが、図書館学である」という定義です。

同時期にフランスやイギリスでは、これと同じ概念をライブラリーエコノミーという言葉で表現し、図書館の効率的・合理的運営、素早く本を提供するための知識と技術の総体として、深化を進めていきました。職人技的な伝承から「学校での教育」に転換したのは19世紀の終わりからでして、十進分類法の開発者であるメルヴィル・デュエイが1887年にコロンビア大学において開設したのが、世界最初の図書館職員養成学校であり、名称はスクール・オブ・ライブラリーエコノミーです。その後図書館学校は、職人養成の専門学校であると公共図書館の中に設置されていきました。

「大学で教えるべき」となったのは20世紀に入ってからです。そして、1920年代ころから、図書館学校では図書館の司書職、すなわち資料を整理分類できる専門家を養成すべきであり、あらゆる主題分野の資料を扱えなければならないから、学士号をもっていることを入学資格にすべきであると提唱されるようになりました。こうしたことから、1926年にシカゴ大学に最初の大学院の教育課程としてのGraduate School of Libraryが設置されました。

日本では、第2次世界大戦後の1949年に、我々の教育組織の前身「文部省図書館員養成所」が設置されました。そして、先程の高山先生のお話に創業者という言葉がありましたが、Japan Library School

が1951年に慶應義塾大学に創立されています。1952年には日本図書館学会も設置されました。初期の歩みを概観しましたが、図書館学というのは、その生い立ちから、「現象の問題から発し、その成果を実際に活かす応用科学であり、図書館という現場を持つ実践の科学」ということができます。要するに実学です。

1960年代以降は、図書館業務へのコンピュータの利用であるとか、データベースの構築・利用が進められ、と同時にドキュメンテーション技術が図書館サービスの中に組み入れられるべきであるとされました。文献単位、本ならば1冊の本単位であったものから、その1章であるとか、さらにはそこに書かれている文章といったように、単位をさらに細かくするような考え方、これがドキュメンテーション科学の基本的な考え方ですが、そういう理念が導入され、これとコンピュータサイエンスとが一緒になって、図書館サービスの現場や図書館学の教育に取り入れられていった時期です。米国では1964年にピッツバーグ大学が最初に Graduate School of Library and Information Science、「図書館情報学大学院」に改組転換しました。

その年、日本では図書館員養成所を母体として「図書館短期大学」が開学しました。国立の図書館員養成機関が、短期大学ではありますが、大学教育の組織として設けられたことは画期的といえます。1968年、慶應義塾大学では「図書館・情報学科」と改称しています。

1970年を日本では“情報元年”と名付けました。1971年には図書館短期大学の中に、ドキュメンテーションを中心領域にする「文献情報学科」が設けられ、そしていよいよ1979年「図書館情報大学」が、「図書館学と情報学の融合を目指す」ことを設立の理念として開設されました。実際には翌1980年4月から学生を入学させています。この1980年という年は、アルビン・トフラーの「第3の波」が日本語に翻訳出版された年です。要するに、“情報革命”ということで、これからの社会は情報によって革命的転換が起こるといふ予測が盛んに論じられた年です。

1983年に米国図書館協会がそれまで『図書館学辞典』という名称で刊行していたものを『図書館情報学辞典』と変えたことに代表されるように、米国の大学院では1980年代末までに、ほとんど全てが「図書館情報学大学院」と改名し、そして、当然のことながら図書館学の教員に加えて、情報学、ドキュメンテーション学等々を専門とする人たちをスタッフに入れて改組を行っています。カナダでも同様です。その辺は我々の大学でも同様でした。図書館情報大学では1984年には修士課程の大学院「図書館情報学研究科」を設置しました。

1990年前後には、デジタル化技術の進展、インターネットの普及などにより、すべての学問領域や社会のさまざまな側面で「情報」が基盤要素になるということで、情報、情報としきりに言われました。我々の大学では、図書館は情報が知識として定着したものを扱う機関であるとの認識から、10年前から情報に加え知識を扱う「知識情報論講座」を1993年に設置しました。図書館情報学が、知識資源の流通と新しい知識の創造にかかわる科学へと発展してきていると考え、「知識を扱おう」としたわけです。

このような開学以来10数年間、一貫して議論の対象になっていたのは、「図書館学と情報学を融合することができるのか」ということです。図書館学と情報学を融合することは図書館情報大学の設立の理念でしたが、教員が集まると常にこの問題を論じていました。「ライブラリー&インフォメーションサイエンス」の「&」というのは、ライブラリーサイエンスとインフォメーションサイエンスの「並列のアンドなのか」、「合体のコンビネーションの意味か」、「融合フュージョンなのか」などが繰返し議論されました。

米国では1996年頃から文系、理系を問わず、情報に関する教員を集めて図書館情報学大学院を再構成する動きが出てきました。そして、ピッツバーグ大学の「School of Information Science」とか、ミシガン大学の「School of Information」のように、教育組織・課程の名称から図書館という文字を外す例も出てきています。日本では2000年に設置された「国立情報学研究所」は“Informatics”という言葉を使っておられます。

こうした中、我々としても図書館情報学をさらに発展させた大学院を構築したいということで、2000年に大学院を区分制博士課程の「情報メディア研究科」に改組再編成しました。そして情報メディア研

究科は、「人間の知的創造活動の基盤となるソフトインフラ全体について、学際的かつ総合的な教育と研究を行う」と定義しました。図書館学と情報学、そしてその融合である図書館情報学を「人間の知的創造活動の基盤となるソフトインフラに関わる領域」とし、それを拡大したものが情報メディア研究と捉えたわけです。

学段落階の教育の方では、2004年に「知識情報図書館学類」「情報メディア創成学類」「情報科学類」という形に再編しました。「情報科学類」はコンピュータサイエンスの教員が担当しています。

この図 (PPT, no 4) は、情報メディア研究の領域概念を示しています。「図書館学」にコンピュータサイエンスとか、情報科学的な要素が入ってきてそれらを融合させた「図書館情報学」があり、それを広い意味での情報学の基盤の上で、文化、社会、法律、制度といったような接点で人文社会科学系の方角に、また、ネットワークやハードウェア、デバイスなどを切り口に理工学系に、さらには情報の受容ということを切り口に、人間とか知識・知能とか心理といった領域に広げた研究領域としています。

さらに、最近力を入れているのは図の上の方角の、表現とかデザインとかコミュニケーションをキーワードとして芸術やデザインと繋がる、コンテンツそのものを教育研究の対象とする領域です。どのような表現方法をとることが他者に理解され易いコンテンツになるか、個々のコンテンツごとに相応しい発信方法とはというようなことを具体的内容とします。図でいえば、上と下を繋ぐようなことになりませんが、これを「情報メディア創成学類」では大きなテーマとしていますし、研究スタッフ面でもこの分野を充実させていこうと考えています。

次に、研究科内の教員の内部構成について説明します。私たちのところではこの4つの教育研究分野を内部組織としています (PPT, no 5)。「情報メディア社会」は前の図の右側に向かう方向を主に教育研究する集団です。「情報メディアマネジメント」は旧来の図書館学的な領域を主としますが、もちろんそこに留まるものではありません。それから「情報メディアシステム」は情報科学を図書館の管理運営やサービスに適応させることをルーツとする領域です。そして「情報メディア開発」はコンテンツの創成、構造化というふうなことを主なターゲットにする領域です。教員の構成数で見ますと、情報メディア社会に17名、マネジメントに21名、システムに13名、開発に14名。総体として65名の教員で構成しています。

その他、研究科と連動して、研究科のリサーチフロントとして「高度情報ネットワーク社会における情報基盤に関する研究」を進めるため、「知的コミュニティ基盤研究センター」を置いています。ここには知の表現基盤部門、知の共有基盤部門、知の伝達基盤部門、知の環境基盤部門を設けています。このセンターは、先程の4つの教育研究分野をさらに先端的に担ってもらう組織として設けているものです。

これら内部組織の他、「図書館学」「図書館情報学」が実践の科学であることから、応用への視点を重視しつつ先端的な研究に触れさせることを目的に、4つの学外機関と連携協定を結んでおり、授業担当と学生の研究指導をしてもらっています。

さらにもう一つ、「ニューパブリックマネジメント (NPM)」などで、官民協力体制による公共施設の運営、具体的には指定管理者制度により、図書館の運営を民間の組織が委ねられることや、長崎市などのようにPFIによって図書館が建設・運営される事例がでています。そうした問題について検討するため、図書館流通センターから寄付をいただきまして「図書館経営寄付講座」を設置しています。平成18年から10年間の予定で、目的を「図書館経営のための人材養成」としています。総務省と文科省から来ていただく准教授2名で構成しています。

次に、今までお話ししてきたような教員組織で展開する教育プログラムですが、来年4月からこのスライド (PPT, no 10) に示す4種の教育プログラムを動かす予定です。

まず、筑波地区では、【フルタイムプログラム】と呼ぶ修士 (図書館情報学) と修士 (情報学) の学位プログラム方式によるものが基本です。ここでは学生の科目選択範囲を狭めて、ターゲットを明確にした授業履修をさせようと考えています。この他に、留学生を対象とし、英語のみでの講義、演習と教育指導を行う【英語プログラム】です。これはG30型のもので、8月から開設することで計画していま

す。また、東京サテライトで平日の夜間と土曜日を使って【図書館情報学キャリアアップ・プログラム】を設けます。これは現職の図書館員のまさに「キャリアアップ」を図る教育プログラムです。さらに、先程言いました「寄付講座」の教員等が担当する【図書館経営管理コース】を設けます。これは履修証明プログラムという科目等履修を基本とするものです。なかでも【キャリアアップ・プログラム】は、今までも少しやっていたのですが、現職の図書館員等に限定して受入れて再教育することに、さらに力を入れていきたいと見直したものです。

入学者のイメージとしては、九州大学の構想でも挙げられていたような、図書館情報学を学んだ学生、文系・理系を問わず他の領域を学んだ学生、一般企業等の現職社会人、そして留学生です。なかでは、第2番目の他の領域を学んだ学生、第3番目の現職者、社会人を幅広く取り込んでいきたいと考えておりますが、実際にはなかなか難しい面もあります。

このように、図書館学からの変化の過程を見ていただきましたが、デジタル情報ネットワーク社会の進展に伴い、図書館学、図書館情報学を取り巻く環境の変化が、さらに速度と範囲を大きなものにしていく中において、我々の組織としてもさまざまな形でこの状況に対応すべく、変身しつつ、さらに前進するということを目指しております。

さて、図書館という施設、あるいはその機能を存立の根拠とする「図書館学」ですが、その「図書館」が絶滅危惧種ではないかという話があります。これは1982年にF.W.ランカスターという人が『紙からエレクトロニクスへ - 図書館・本の行方』という著書の中で、「図書館は知識の伝達、再生産の場所である。その媒体が紙に印刷された図書であったため、紙に印刷された図書を納める館としての図書館が作られてきたのである。媒体として紙に印刷された図書が電子的なものに転換すれば、まず物理的な形での『図書』が消滅しそれを収蔵する『図書館』というものも消滅する」とし、2000年には利用者は図書館に行く必要はもはやなくなっているだろうと予測しました。この書は関係者には大きな衝撃を与えましたが、実際、大学図書館関係の多くの方がご承知の通り、2000年以降かあるいはもう少し後ですが、科学、工学、医学の分野の学術雑誌の多くは電子ジャーナルに転換され、利用者はそれを閲覧するためであれば大学図書館に行く必要はなくなりました。また、大学図書館では印刷版の雑誌の購入を止めてきています。まさに彼の予測の通りになっているわけで、“絶滅へのシナリオ”という記述に従えば、次は「今ある図書館は古い図書の倉庫になるだけである」とされています。

国立国会図書館の長尾館長は1996年に、「20年から30年先には、出版されるものの70パーセント以上は電子形態のみになる」とおっしゃっておられますし、ご承知のようにグーグルブックスキャン、国立国会図書館のデジタルアーカイブというものは急速に既存の図書をデジタル化しています。また、各種の電子書籍端末が登場して来て、電子出版と図書館がどのような関係になるかについては、なかなか予見できないと言える状況です。

このような中において、図書館情報学の教育組織における人材養成ということをみれば、当然ながら、図書館員の養成は一つの大きな部分を占めています。高山先生からは「もうマーケットはない」とのお話があったところではありますが、限られた中でも売れる人材を養成するためには目標を明確に捉えなければなりません。これから養成・育成すべき図書館員像を大学図書館、公共図書館の別に見ていきたいと思えます。

有川総長が部会長であります文部科学省の「学術情報基盤作業部会」では、「大学図書館の整備について（審議のまとめ）」を本年12月3日に一応の案としてまとめています。そのなかで養成すべき大学図書館職員像を5種挙げています（PPT, no 14）。この5種類の専門性を身につけた職員は、大学で新卒者として養成するというだけではありません。図書館の中で実際に業務経験を積みながら成長していく、あるいは社会人大学院生として学び直すことも想定しています。

第2番目の、「特定の主題分野のコレクション構築を行うとともに、その主題にかかわる学習研究を行う利用者に対してサービスを行うライブラリアン」は、まさに「サブジェクトライブラリアン」であり、3番目の、「教員や学生とコミュニケーションをとりながら、教育課程の企画、実施にかかわるラ

「ライブラリアン」は「リエゾンライブラリアン」と呼んでいる人たちであろうかと思います。我々の組織では、こういう人たちを育成していくということも常に意識しながら、教育プログラムを、あるいは研究のテーマを設定していこうと考えているところです。

次に、公共図書館員像に関しては、文部科学省の協力者会議が「これからの図書館像～地域を支える情報拠点を目指して」を平成18年3月に公表しております。そこでは「これから目指すべき図書館像は課題解決支援型図書館である」とし、この図書館では「職員が専門的知識、技術、経験を基に、利用者のさまざまな課題解決を支援する」としています。このような図書館になることにより、絶滅に向かうのではなく、世の中で存在意義を高めようとするものです。

職員像として図書館長には、スライド (PPT, no 15) に示す6つの事柄について「リーダーシップを発揮する」ことが求められています。中では「利用者の視点に立った経営方針の策定」や「自分の図書館のサービスを評価できる」、「予算を獲得することができる」が重要であり、これまではどちらかといえば強調されてこなかった点です。これは、要するに首長等々に対し、自分の図書館の存在意義と働きぶりをきちっと説明できる図書館長であると言えます。

一般の図書館員は、「専門主題情報担当者になっていく必要がある」とされ、「そのためにはリカレント教育、つまり社会人大学院での履修が有効ではないか」と記述されています。ただし、この「専門主題の情報担当者」の養成・育成は非常に困難であるとも述べられており、現実的には利用者へのサービス提供に当って、他の機関に所属する専門的な知識を持つ人、企業関係者、法曹関係者などの協力を得ることが欠かせないとされています。

このようなことで、我々の組織として新たに拡充を計画している方向をまとめますと、人材養成の面では、第一に、九州大学の専攻と同一の方向ですが、アーキピスト養成プログラムを構築していこうと考えています。第二には、多様で高度な情報メディアコンテンツの創成とか、発信にかかる専門職業人を養成するプログラムを拡充していこうと考えています。第三は、「図書館を運営できる図書館員養成プログラム」です。これは先程見ていただきました資質を備えた図書館長を作っていけるような教育をしようということです。その方法の一つは現職者のキャリアアップ・プログラムであり、もう一つは図書館経営管理コースですが、その他にも「自分の図書館の経営状態を調査、分析、評価できる能力を持った人」、あるいは「コレクションをきちっと構築して、それをマネジメントできる人」を養成することを目的とする方向に教育プログラムを充実させていきたいと考えています。

次に、研究・教育の面では、まず「現在の図書館を超えた新しい図書館サービス基盤の構築に向けた教育と研究」を拡充したいと考えています。2番目は、高山先生からもお話がありました「MLA 連携」にきちんと取り組もうと思っています。また、アジア太平洋であるとか、欧米の大学との連携を強化することに、我々としての方向性を設定しているところです。

以上が我々の教育研究組織に関する話ですが、九州大学のライブラリーサイエンス専攻のプログラムを拝見しますと、“課題解決型教育”を重視され、その方法として“プロジェクトチーム・ラーニング”を導入されておられることが、教育プロセス、人材育成にとって非常に重要な点であると思います。さまざまな教員等が多様な視点から一人の学生を指導することは、幅広い主題の資料と情報を扱う図書館情報学、あるいは記録管理学においてはきわめて有益であると思います。

我々のところでも修士の段階では1人の学生に対して2人の教員で、博士課程では1人の学生に対して3名の教員で指導する体制をとっておりますが、九州大学では研究科の枠を超えて、広い範囲からの教員が1人の学生の指導に当たる計画になっていることが大きな特色であろうと思います。これがどういう形で実を結んでいくかについて、注目していきたいと思っています。

最後になりますが、最初に申し上げましたように、我々としまでもこちらの新しいライブラリーサイエンス専攻と連携協力しながら、この領域をさらに拡大させ、マイナーディシプリンというようなことから脱却してまいりたいと思っています。これまでの図書館を超えた新しい図書館サービス基盤を、

ともに考え、ともに教育研究することで、図書館の存在価値そのものを高めることを目指したいと思います。いろいろ課題はありますが、一緒に悩みながら模索していければいいなと思っていると表明させていただき、私の話を終りたいと思います。どうもありがとうございました。

図書館情報学の未来 九州大学の新専攻に期待する

2010年12月18日
筑波大学
植松貞夫

NO 1

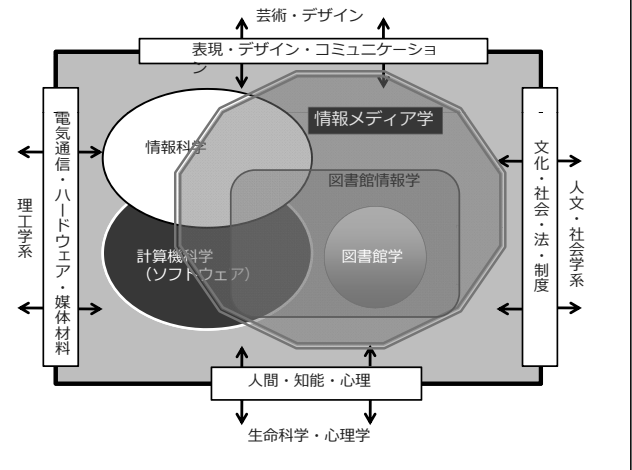
図書館学→図書館情報学→

米国・カナダ	日本
1808年 「図書館学」について初の用語定義	
1887年 最初の「図書館員養成学校」 コロンビア大学 School of Library Economy	
1923年 司書職の養成は学士号を入学資格に	1949年 文部省図書館職員養成所 1951年 ジャパン・ライブラリー スクール創設 1952年 日本図書館学会設立
1926年 シカゴ大学に大学院教育課程設置 Graduate School of Library Science	
1963年～ 図書館業務へのコンピュータの利用 データベース、ドキュメンテーション技術	1964年 図書館短期大学開学 1968年 図書館・情報学科：慶應義 塾 ◇1970年 情報元年 1971年 文献情報学科開設 1979年 図書館情報大学開学 図書館学と情報学の融合 1980年 『第三の波』刊行
1964年 ピッツバーグ大学が Graduate School of Library and Information Science に改組	

NO 2

米国	日本
1982年 トロント大学で改組	1984年 大学院図書館情報学研究科 開設（修士課程）
1983年 『図書館情報学辞典』にALA	
◇1980年代末までにはほとんどの 大学院で改組・改名	
◇1990年代～ デジタル化技術 インターネットの普及 情報革命 ◇全ての学問領域で情報が基盤要素に なる	1993年 知識情報論講座を設置 「知識資源の流通と新しい知識 の創造にかかる科学へと発展」 1998年 日本図書館情報学会に改称
1996年頃～ 文系、理系を問わず情報 に関する教員を集めて再構成 ピッツバーグ大学： School of Information Science ミシガン大学： School of Information など、「図書館」の文字をはずす	2000年 国立情報学研究所設置 (Institute of Informatics) 2000年 大学院情報メディア研究科に 改組（区分博士課程） 2004年 情報学群設置 □知識情報・図書館学類 □情報メディア創成学類 □情報科学類

NO 3

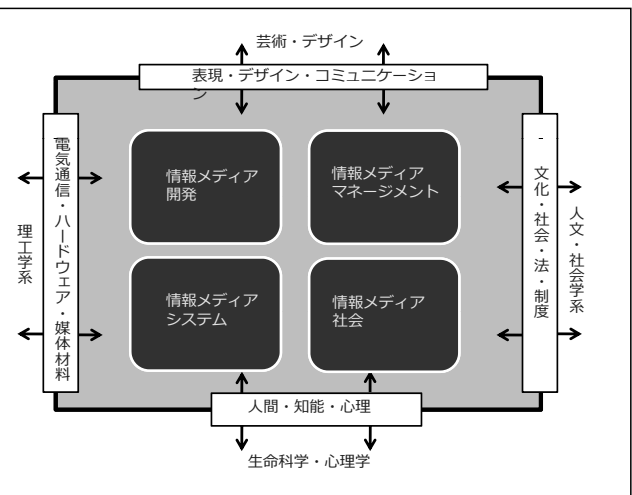


NO 4

4つの教育研究分野

- 情報メディア社会
 - 情報にかかる法律・政策・制度、情報文化・メディア史
情報資料
- 情報メディアマネージメント
 - 図書館の経営、情報サービスの計画、情報メディア資源
の組織化、情報メディア資源の評価と活用
- 情報メディアシステム
 - 情報メディア発信・受信・共有化・管理システム、情
報メディアネットワーク・基盤システム
- 情報メディア開発
 - コンテンツの創成・構造化、コンテンツ媒体、コンテ
ンツ評価・共有

NO 5



NO 6

知的コミュニティ基盤センター

研究科のリーサーチフロント：高度情報ネットワーク社会における情報基盤に関する研究

- 「知の表現基盤」部門
情報発信支援システムの研究開発
- 「知の共有基盤」部門
デジタルライブラリー、メタデータ
- 「知の伝達基盤」部門
図書館・情報サービス機関の評価方法
- 「知の環境基盤」部門
基幹デバイスの開発研究

NO 7

連携機関

- 株式会社電通（社会分野）
- 理化学研究所（マネージメント分野）
- NTTアクセスサービスシステム研究所（システム分野）
- 凸版印刷株式会社（開発分野）

NO 8

図書館流通センター図書館経営寄付講座

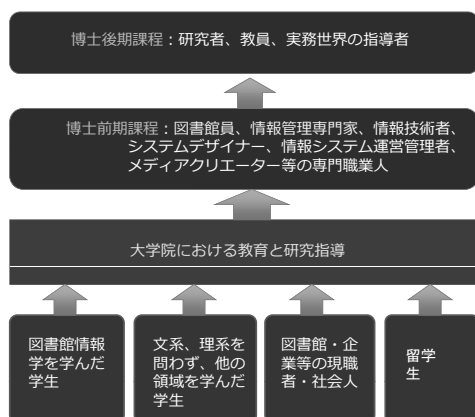
- 平成18年度より27年度まで10年間
- 目的：図書館経営のための人材養成
- 准教授2名を採用
公共経営論（NPM）：総務省
公共サービス論：文部科学省

NO 9

4種の教育プログラム

- つくば
- フルタイムプログラム
修士（図書館情報学）、修士（情報学）の学位プログラム方式
- 英語プログラム
英語でのみ講義・演習・研究指導
東京サテライト（平日夜間+土曜）
- 図書館情報学キャリアアッププログラム
図書館職員等現職者限定
- 図書館経営管理コース
履修証明プログラム

NO 10



NO 11

図書館は絶滅危惧種か

- 図書館は知識伝達・再生産の場 → 媒体が紙の図書 → そのための場所＝「図書」館がつくられてきた → 電子媒体に転換 → 2000年には「利用者は図書館に行く必要はもはやなくなっている」（F.W.ランカスター、1982年、『紙からエレクトロニクスへ 図書館・本の行方』）
- (2000年以降)STM（科学・工学・医学）領域の学術雑誌の多くは電子ジャーナル化され、利用者は大学図書館に行く必要はなくなった。
大学図書館では冊子体の購入をやめてきている

NO 12

- 「20～30年先には出版されるものの70%以上のものは電子形態のみのものとなり」（長尾真、1996年、「電子図書館時代へ向けての大規模図書館の未来像」）

□ Google Book Scan

□ 各種電子書籍端末の登場

□ 国立国会図書館デジタルアーカイブ

当館は、デジタル化した資料及び将来電子的に納本される書籍等を著作権者及び出版社の利益に配慮しつつ、国内のどこからでもアクセスできるような仕組みを模索しております。その仕組みの要点は、公共的な団体に当館のデジタル資料を無償で提供し、当該団体が公衆に有料で配信して、その料金のうちから権利者等に還元するというものです（2009年）

NO 13

養成すべき大学図書館職員

「大学図書館の整備について（審議のまとめ）」20101203

- (1) 学術情報流通に詳しく学術情報基盤を構築できるライブラリアン
- (2) 特定の主題分野のコレクション構築を行うとともに、その主題に関わる学習・研究を行う利用者に対してサービスを行うライブラリアン
- (3) 教員や学生とコミュニケーションをとりながら教育課程の企画・実施に関わるライブラリアン
- (4) 研究者として図書館情報学の発展を担うライブラリアン
- (5) インターネット等の技術を駆使して新しい利用者サービスを構築するライブラリアン

NO 14

公共図書館職員

『これからの図書館像-地域を支える情報拠点を目指して』
平成18年3月：文部科学省

■ 課題解決支援型図書館

→ 職員が専門的知識、技術、経験をもとに
利用者のさまざまな課題解決を支援する

- 利用者の視点にたった経営方針の策定
- 効率的な運営方法
- 図書館サービスの評価
- 継続的な予算の獲得
- 広報
- 危機管理
- 図書館職員
 - リカレント教育
 - 専門主題情報担当者の教育

NO 15

拡充を計画している方向

(1) 人材養成

- 「アーキビスト」養成プログラムの構築
九州大学新専攻と同一の方向
- 多様で高度な情報メディアコンテンツの創成、発信にかかる専門職業人・研究者を育成するプログラムの構築
- 図書館を経営できる図書館員養成プログラム
現職者のキャリアアッププログラム
図書館経営管理コース：履修証明プログラム

NO 16

(2) 教育研究

- 現在の図書館を超えた、新しい図書館サービス基盤の構築に向けた教育研究
- 図書館・ミュージアム・文書館等と教育コミュニティとの連携拠点
- アジア太平洋地域、欧米の大学との連携強化

NO 17

ライブラリーサイエンス専攻

❖ 講義

<課題解決型教育>

- ❖ P T L
- ❖ インターンシップ
- ❖ 研究指導

❖ 記録管理の専門家

- ❖ 情報専門職
- ❖ 情報管理・提供組織の管理者
- ❖ 情報通信技術専門家
- ❖ 研究者

NO 18

パネルディスカッション

[全体司会]

パネリストの方々をご紹介します。

向かって左のテーブル、右端にご着席は、先程ご講演をいただきました植松貞夫先生です。そのお隣が、やはり先程ご講演いただきました高山正也先生です。左端にご着席は、九州大学附属図書館付設記録資料館館長の三輪宗弘先生です。

三輪先生は近・現代史のご専門です。記録資料館は旧産業労働研究所および旧石炭研究資料センターを引き継ぐ組織で、北部九州地域のエネルギー関係の膨大な資料を所蔵していることで知られております。記録資料館では同時に、旧九州文化史研究所が収集した江戸時代の大量の資料も管理しております。いずれも九州大学を代表するアーカイブズ資料です。

皆様から向かって右側のテーブルの左端にご着席は、慶應義塾大学の倉田敬子先生です。倉田先生は図書館情報学、とりわけ研究情報のオープンアクセスに関する研究に携わっておられます。実は、つい昨日 [2010年12月17日]、文科省の科学技術政策研究所が毎年選定しております「科学技術の顕著な貢献2010 (ナイスステップな研究者)」のお一人として選出されたという、うれしいお知らせを受けました。倉田先生、おめでとうございます。

そのお隣は、新専攻の専任教員の一人である、本学大学院システム情報科学研究院の富浦洋一先生です。富浦先生は、情報学、とりわけ自然言語処理がご専門で、ライブラリーサイエンス専攻では、情報の組織化、検索提供方法についての研究、教育をご担当いただきます。新専攻設置準備に際しては、文科省や設置審とのやり取りの先頭に立たれ、ご奮闘なさいました。

向かって右端は、本日のパネルディスカッションの司会を務められます附属図書館副館長、医学研究院ご所属の吉田素文先生です。吉田先生は、医学教育学に大きな熱意を持って臨んでこられ、新専攻においても、情報の管理・提供における、とりわけ、教育・学習の研究に携わられます。新専攻構想の当初の段階から強いリーダーシップでワーキングを率いられ、今日を導かれた第一の功労者でございます。

それでは、ここから吉田先生にマイクをお譲りいたします。よろしくおねがいします。

[司会・吉田]

それでは、早速、パネルディスカッションを始めさせていただきますと思います。

2011年4月1日に九州大学統合新領域学府に開設されますライブラリーサイエンス専攻の今後の発展のために、新専攻の構想を、図書館情報学やアーカイブズ学の現状をふまえながら、あらためて考えたというのが、このパネルディスカッションの目的です。

そこで、先程ご講演をいただきました講演者の先生、あるいは、今登壇しておりますパネリストだけにとどまらず、フロアの方からも活発なご意見をいただきたいと思っています。後ほど、ディスカッションの時にマイクを廻しますのでご発言をいただければと思います。

パネルディスカッションの進行についてですが、まずライブラリーサイエンスとはなにかを、設置の背景との関係で考えてみたいと思います。つぎに、新しい大学院専攻を九州大学に開設する意義、ならびにライブラリーサイエンス専攻の理念と目的を考えたいと思います。さらに、新専攻で養成する人材像や予想される進路も一つのテーマとして考えていきたいと思います。

それでは、まずライブラリーサイエンスとはなにかについて、まずはパネリストの先生方からお話しいただきたいと思っています。ご講演の先生方からは、関係の問題を多々ご指摘いただきましたが、あらためて、思われるところ、お気づきの点をご発言いただきたいと思っています。

まず、高山先生からよろしいでしょうか。

[高山]

先ほど、長口上を申し上げましたのであまり言うことはないのですが、ライブラリーサイエンス、とカタカナになっているということについて若干感想を申し述べます。これは、学の基盤として、という意味かと思います。学の基盤ということは、単に大学の基盤というだけではないと、私は思います。最近あまり聞かれませんが、1990年代には、21世紀は情報化の社会ということがさかんに言われました。現在の私たちが暮らしている社会がいわゆる情報化社会というわけです。そこには、ライブラリーやアーカイブズなどのような、知的情報資源を目的にかなったかたちで活用できる組織が、社会インフラとして組み込まれていなければならない。そのために必要な人材も養成しなければならないし、情報化社会をどう築き上げるか、あるいはそのような社会をどう見るかを研究する科学領域、学術領域をつくってもしなければいけない。それがライブラリーサイエンスであると考えます。そして、私の立場から言わせていただきますと、そのライブラリーサイエンスには、当然のこととしてアーカイブズ、アーカイバル・サイエンスが入っている、と考えたいと思っております。

[司会・吉田]

ありがとうございました。

それではアーカイブズ、あるいは記録管理の視点から、三輪先生に補足のご発言をいただきたいと思っております。

[三輪]

今日は一言も発言させていただけなかったものですからフラストレーションがたまっております、私は話し出すと止まらないものですから、気をつけながらお話ししたいと思います。

現在、情報の管理とか提供のあり方が問題になっていますが、私は今日、写真集を持って来ました。2冊の写真集です。

これを見て多くの人は「素晴らしいな」と思ったかもしれませんが、しかし、私はこの2冊の写真集を見てアタマにきました。なぜアタマにきたかと言いますと、写真の来歴や請求番号が書かれていないのです。どのようにすれば、この写真にたどり着けるのか、チェックできるのか、それが書かれていないわけです。私はアメリカの国立公文書館で、この写真を再点検するために、非常に多くの時間を要しました。非常に残念なことです。日本がいかに遅れているかということをお知らせしているのだと思います。

もう1点、私の体験をお話しさせていただきたいと思っております。私は20年近く前に、初めてアメリカの国立公文書館を訪れました。そのときアーキビストという言葉を知りました。それまではまったく知らなかったもので、初めて聞いたとき、これは何のことかと思いました。アーキビストとは、膨大な資料を管理して、閲覧者に情報を提供する人なのです。そのとき私が見たのは、RG131という請求番号がついた資料でした。第二次大戦前の商社の資料です。日本の商社の資料が、日本が真珠湾を攻撃したときに押収されたのですが、アメリカはそれを全部保管していました。しかも、ただ単に保管していただけてはなくて、その資料を徹底的に分析して、日本の商社がアメリカのメーカーからどんな機械、工作機械を買って、どこの町のどの工場に入れたかということまで徹底的に調べているのです。それを何に使ったかということ、日本の空襲に使ったわけです。どこの町のどの工場を爆撃するか、そこまでやっているわけです。

つまり、資料の使い方ですね。今日、高山先生がインテリジェンス研究の大切さということをおっしゃられました。日本の場合、このような資料の使い方というのは、まったくなされてはいないわけです。これについてはこのくらいにしておきますが、とにかく、この写真集には番号がついていないのです。これを作った出版社の方、ぜひ写真の保存場所と請求番号を載せていただきたいと思っております。こういうところが非常に遅れていると思っております。私はアーカイブズや記録管理を、新専攻で教えることになりませんが、そのあたりを学生にしっかり教えていきたいと思っております。

[司会・吉田]

ありがとうございました。文書管理の重要性の一端を、具体例をあげてご説明いただいたと思います。それでは、同じくライブラリーサイエンスにつきまして、図書館情報学の視点から、植松先生、倉田先生にご発言をお願いしたいと思います。

[植松]

「情報」ということがお話しに出ていますが、私たち、筑波大学では「知識」というものを大事にしよう、ととらえています。

いわゆる知識基盤社会が話題となっていますが、これが、きちんと人々の暮らしのなかに入って行くためには、誰もが正確な情報を、公平に入手できる社会的な仕組みが必要というわけで、それを担う機関が図書館であるととらえています。

古今東西の知識を集積し、同時に電子化されたものも含めて、情報へのアクセスを提供する。それによって、新たな知識を再生産する場を研究しようという、ライブラリーサイエンス専攻で訴えられている「循環」という側面を大事にしようということは、基本的に私たちも考えているところです。

現在、情報のデジタル化が進んでいますが、デジタル化する技術開発の方向は、素人がアクセスしやすいとか、素人が本当に望むものを見つけやすいという方向に向かっている。そのときに、図書館という仲介者が、どのような役割を果たしていくことができるのか、あるいはどこまで関与するのがよろしいのか、先ほど申し上げた、誰もが正確な情報を公平に入手できる場所として、どのように関与すべきなのか、ということが一番のキーワードではないかと考えています。その意味で、コレクションを構築できる人材や、サブジェクトライブラリアン、さらには、きちんと自分の図書館を評価できる図書館長などを教育できるプログラムを大事にしていきたいと考えています。

[司会・吉田]

ありがとうございます。それでは倉田先生、お願いします。

[倉田]

私はどちらかといいますと、情報メディアとか研究者間のコミュニケーションを専門に研究してまいりました。これまで皆さまが、基本的なところは繰り返し述べてくださったと思っております。記録管理学にしても、図書館情報学にしても、アーカイブズにしても、非常に似ているなということを、皆さん大変感じていただけているのではないかと思います。

それは、横に切りますと非常に似ているということです。これらの間には共通要素があり、私は、その一つがメディア、つまり、どういう媒体なのか、どのようなかたちで情報を秩序化し形式化するか、という部分だと思っています。そして、今は、その部分が根幹から変わりつつある時代だと思っています。つまり、今までかなり長い間、出版物や印刷物の世界が続いていて、それを前提にした上でいるんなシステムを考えて、あまり間違いはなかった。ですから「知の継承」と言ったときに、図書を集めておけば何とかあった部分はあったと思います。

でも、今はそうではない。もう図書の時代ではないわけです。図書もあるんですが、図書だけでは済まない時代に完全に足を踏み入れているわけです。だからといって、図書はいらなくなるとか、古いものはどうでもいいという気はまったくなくて、それも扱わなくてはいけないのですが、それ以上の部分も、当然のことながら、扱うことを期待される時代になっているのだと思います。

つまり、根本的に、人間がなんらかのかたちでコミュニケーションをする形態や形式が変わったときに、いったいどういうかたちで社会全体に、先ほども植松先生がおっしゃっていますように、適切なかたちで、しかも必要な人に、必要なときに、情報やデータをきちんと提供できる社会をつくるのか、ということです。具体的なかたちで、社会全体の基盤をどうつくっていくかという視点で考えたときに、この研究領域というのは、いろんな方向に非常に発展していく可能性があるのではないかと考えています。

[司会・吉田]

ありがとうございました。社会をつくるという非常に大きなテーマをご提示いただきましたが、ライブラリーサイエンス専攻でも「知の創造と継承」がテーマになっていて、この過程に照らすと、現在、情報の管理・提供をする側がどのような課題を抱えているのか、ということが問題となります。

ここで、フロアから、新専攻の趣旨について、これはどういう意味なのかとか、自分はこう考えるというような、いろいろなコメント、ご質問をいただきたいと思います。特に今後、この専攻を受験しようと思っていられる方なかで、分かりにくくて、いまひとつよく分からないという方がいらっしゃいましたら、ぜひご質問いただきたいと思います。

[参加者]

本日は貴重な機会をありがとうございます。

これは聞くまでもないことかも知れませんが、新専攻紹介を見る限りでは、文字情報が比較的強く意識されているという印象があります。ただ、現在は、映像であったり、画像であったり、文字以外の情報の活用が非常に求められているのではないかと思います。ライブラリーサイエンス専攻の教育にあたって、その点がどれくらいカバーされているかをお伺いしたいと思います。

[富浦]

その点は設置審でも指摘されたところです。もちろん文字以外の情報、メディアは非常に重要なのですが、たとえば文字以外の情報を組織化するとき、現在どういう技術があるかと言いますと、画像であれば画像認識をして、そのシーンがどのようなものであるかということのカテゴリ化していかなければいけないですね。あるいは、人手でタグをつけていくという方法。いずれにしるカテゴリ化された記号、あるいは人手でタグを付けた文字情報を使って組織化することになると思います。つまり、まず「認識」の段階があり「記号化」されたものができて、それを「組織化」する。このような問題への取り組み全部を、11名しかいない私たち専任教員でカバーするというのは無理なので、当面「認識」の部分は、たとえばシステム情報科学研究院などのパターン認識をやっておられる専門の先生方で進めていただき、ここでは記号化された情報のカテゴリ化、組織化の方に重点を置きたいということです。

将来はもちろん、文字以外の多様なメディアも含めて管理、提供を考えたいと思っていますが、当面は文字中心にしていきます。

[司会・吉田]

追加でお話したいと思います。ライブラリーサイエンス専攻では、他の学府、あるいは統合新領域学府の他専攻の授業科目を受講いただいて、いまおっしゃられたようなところを補完することも充分考えられます。指導教員が、この学府にこういう科目があるよ、というような指導をしたいと考えています。よろしいでしょうか。

[参加者]

三輪先生にまず一点伺います。先ほど、番号がない、番号がないと目を白黒させてお話しいただきましたが、その番号というのは資料整理の番号のことをおっしゃっているのだと私は推測しております。私は図書館の現場の職員でもありましたが、図書館ではかならずNDC、つまり日本十進分類法にもとづく記号をもって資料を配架して、利用しようとする人が早く資料を見つけ出せるようにしてまいりました。

それから倉田先生、よろしいでしょうか。現在、メディアのなかで、電子書籍というものが非常にやりはじめています。出版社が直接配信する情報を自宅でキャッチすれば、利用者は図書館をあてにせず自宅、それもわずかなお金で資料を読むことができるので、図書館はいらぬのではないかなというように言われております。そのようになったならば、図書館は一体どうなるのだろうか、現場

の司書たちはどうなるのだろうか、ということです。新聞などでは、「いや、紙はなくなる。なくなるから、図書館は厳然としてある」とも書かれていますが、はたしてそのようになるかどうかということさえ、いまもって分からない状態にあるわけです。ですから、電子書籍をあまり言いたてるのは、現場を混乱させるのではないかと思います。

それから、高山先生に伺います。図書館には司書、博物館や美術館には学芸員という資格があって、それを取得するためにはそれ相当の勉強をしておりますが、今度できますライブラリーサイエンス専攻というのは、このような現場の人材養成を含めて考えておられるものと思います。ただ、図書館法にもとづいての司書とは公共図書館の司書だと、俗に言われています。大学図書館の司書ではありません。なぜかと言いますと、司書課程では、大学において有用な、資料を素早く集めて助手的な役割を果たす、あるいは語学が堪能というような人材は養成されておられません。ですから、このような隙間を埋めるためにも、ライブラリーサイエンス専攻を設置することを考え出されたのではないかと思います。図書館法にもとづいての司書の養成とこの大学院との関係を伺いたいと思います。

最後に、三輪先生にもう一度、お伺いします。私も現場で仕事をして、さらにまた学生を教える立場になったときに、図書館とは一体何をするとするか、情報を管理するとは一体何なのか、ということから話しを進めてまいります。まず資料の選定、収集ということが第一にあり、それを整理、保存するというのが第二の仕事です。利用者がみえ、ある資料を利用したいと言われるときに、早く提供できるように整理をしておかなくてはいけないからです。そして最後に提供です。図書館を含めて情報管理を行うところは、すべての目的はこの「提供」にあると考えておりますので、私は図書館学を教える際には、根本的に「すべての道は提供にあり」というふうに言っています。

ながながと話しましたが、以上の点について、特に倉田先生には電子書籍の問題をどうお考えになっておられるのか、その点も含みましてよろしく申し上げます。

[三輪]

ご質問ありがとうございます。話したくてウズウズしていたところです。

まず一点目ですが、図書とアーカイブズとは違いがあるのですね。十進分類法のようなものはアーカイブズにはないのです。ですから、私が示した本ですが、ここにはアメリカ陸軍が撮影した写真が、バラバラに入っているのです。1枚1枚がバラバラで、場所も世界中です。しかも日付も何もありません。それぞれの写真の保管場所と請求番号がないと、探そうと思っても、探せないのです。このことに関しては、私のホームページで詳しく解説していますので、三輪宗弘の解説を読んでください。素晴らしい解説ですので(笑)。

もう一つ、この話もしたくてたまらなかったのでお話しします。アーカイブズの管理という場合、大事なものは「選択」ですね。どれを残して、どれを廃棄するかなのです。保存だけではなく、廃棄も大事なのです。これは私の授業でもっとも大事なところです。是非受験していただいて、私の講義を聴いていただきたいと思います。これは日本ではまだほとんど行われていない状態ですので。私は、アメリカ、ニュージーランド、オーストラリア、イギリス等の文書館で、どのように廃棄が行われているかを調べまして、授業をしようと思っています。とにかく、廃棄することが非常に難しいのです。全部を保存するわけにはいきませんから。もちろん、廃棄せず残した資料の整理、保存は、きちんとしなければいけません。

ところで、先生は、提供するのはいいことだと言われましたが、提供すると言ったら廃棄されてしまう資料もあるわけです。また、個人情報がいっぱい入っているのも、全部を提供するわけにはいかないものもあります。九州大学には、30年後に公開することを前提に寄託されている資料もあります。そういう難しい問題があるわけですから、何でも提供すればいいというものではないのです。私の授業では、それもしっかり教えます。是非受験してください。

[司会・吉田]

それでは、倉田先生には、電子書籍についてコメントをお願いします。

[倉田]

いま、さかんに電子書籍について取りざたされています。特に日本では、2010年が電子書籍元年だと言われている。そのような、踊らされたような話しは、いつも聞いています。10年前にもそのフレーズを聞いたような気がします。そういう動きに関しては、踊らされる必要は一切ないと思っています。ただし、今後いろいろな情報が電子化されていくという流れは止められない、と私は考えています。それは、すべてが同じスピードで進んでいくのではなくて、いろいろな分野や情報によって、異なるスピードで進んでいくものではないかと考えています。私が特に専門としています学術情報に関しましては、少なくとも情報が電子化されていないことは考えられない話しです。自然科学系を中心とする基本的な学術雑誌の最近のものはすべて、欧米のものに関しては90%から95%以上が電子化されています。

このような動きにどのように対応するかですが、2000年前後、各大学はものすごく苦勞して、大学図書館を通して一定の契約で雑誌を提供するというシステム、仕組みを作りました。ただし、作ったというより作らされたというところが非常に問題でした。今後、いろいろな関係者が、論文の著者も、出版社も、流通を担当する人たちも、今までの印刷物の時代とはまったく違うかたちで係わってくることは確実だと思います。

他方、電子書籍の出版社のいくつかが公共図書館なんていないと言っているのは、浅学といいますが、あまりよく考えていらっやらないのではないかと思います。今後、本当に出版社が、データや知識の全部を保存できるのかということ、できるわけがないのですね。できるわけがないから、これまで図書館という社会制度が認められていたわけです。ただ、それが電子的なものになったときに、今までと同じかたちの図書館では、やはり対応は無理だと私は思います。その意味で、図書館員は昔のまま、今のままがいいというのは、ちょっと危機意識がないということで、それは困る。繰り返しますが、電子書籍が主流になったら、図書館なんていないなどということはないと、私は思っております。

[高山]

ご質問いただきましてありがとうございます。資格の問題をお尋ねでした。図書館と博物館については確かに司書と学芸員が、それぞれ図書館法と博物館法にもとづいて法定の資格として存在します。ただ、この資格が、皆さま方ご承知のように、現在それぞれの職場、図書館、博物館のそれぞれの職場において、仕事として、しかも知的専門職として、きちんと対応していける能力を保証する資格としては、役に立たなくなってきています。

これにはいろいろな理由がありますが、一つには、時代が変わってきたということがあると思います。図書館法について言うと、1950年にできた法律は、特に資格に関してのところなど、半世紀以上にわたってまったく基本的な変更はなされていない。単位数とか科目の内容が多少変わっただけで、昔と同じやり方で資格が認定されています。

ここにお集りの方々の多くはご存知だと思いますが、いま、関係者の間では資格検定試験をやろうではないかというような話しが出ています。一部、社会的な実験もされました。ここから先は私の個人的な意見ですが、私は資格検定試験などというのはナンセンスだと思っています。と言いますのは、資格検定試験をやりますと、試験に合格することだけを教科書で勉強すればいいということで、これは、プロフェッショナル本来のあり方とまったく正反対の方に動いてしまうという危険があるわけです。プロフェッショナルというのは、世の中の事態がいろいろ動いて、法令がフォローできないようなところでも、専門的な能力できちんと対応していく、ということではじめて意味を持つわけです。ペーパーテストを中心とする資格検定試験で与えられた資格を持っているから、関係の能力があるはずであるというようになってしまっは、自殺行為であると考えています。

アーカイブズの管理については、現在のところ法定の資格はありません。公文書管理法ができるとき

に、資格も制定してはという話がありましたが。資格が定められない理由の一つに、特に管理行政組織では、公的な機関でも民間企業でもそうだと思うのですが、ゼネラリスト主体で運営されている組織内の人事制度において、資格をもった専門職人事がうまく整合しない、ということがあると思います。このことは恐らく、過去半世紀にわたって日本社会がずっと抱えている問題だと思います。この問題については、組織論からも人事管理論からも、まだ解決策が提案されていないという状況ですから、アーキビスト資格を公文書管理法のなかに盛りこむことは見送った、という状況です。

もう一つ申し上げておきたいのは、こういう知的専門職を養成するにあたって、今回九州大学が「大学院レベル」で設けられたということが非常に大きいのではないかと思います。つまり、いろいろな知的背景、職務経験上の背景を持った学生諸君が来るということで、いわゆる高校4年生レベルの人たちに対して専門職教育をするのではないということが、非常に大事なところではないかというふうに考えているところです。

それから先ほど、三輪先生のご発言に、少しフォローさせていただきます。アーカイブズの世界では「評価、選別」というのが一番大事なことです。業務の現場で利用されていた現用文書が、非現用の文書になる際、それを廃棄するのか、アーカイブズとして保存するのかということを決めなければいけないわけです。保存するためには、その資料が歴史的資料として価値があるのか、保存することに意味があるのかを見抜かなければなりません。それを見抜けるのがプロフェッショナルとしてのアーキビストである、ということになっているわけです。

その見抜いた結果はというと、刊行された出版物を網羅的に保存する図書館と違って、世の中に存在する全体の資料のごくわずかがアーカイブズに保存されるのです。たとえば、日本国政府でいま、どれだけの現用の文書量があるかと言うと、1,500万ファイルあります。これは中央政府だけで、自治体や出先機関は入っておりません。その1,500万ファイルに関して、毎年100万ファイルが保存年限満了になります。そして、その100万ファイルのうちの1万ファイルだけが、国立公文書館に移管されてくる、要するに「評価、選別」に合格して来るということで、先ほどの私の話しで1%だけが来るというのはそのことです。裏を返せば、99%の文書は捨てられるわけです。

この際、人間が評価、選別しているわけですから、どんなに優秀なアーキビストであっても、抜けおちたり、間違えるものはあるわけです。たとえば、先日話題となった沖縄返還交渉の密約文書について、関係する主要な外交文書は当然、外交資料館へ行きますが、総理大臣が絡んでいるなら国立公文書館にもあるのではないかという話しにもなります。しかし、国立公文書館には何もありません。本当になかったのか、あるいはあったけれどもどこかに移管されて、公文書館へはこなかったのかすら分からないのです。廃棄されてしまえば、それは歴史の闇なのです。

それでは、先ほど三輪先生が言われたNARA、アメリカ連邦公文書館の場合だといろいろ入っているだろう、日本の占領時代の写真もたくさん入っているだろう、と思われるかもしれませんが。アメリカ連邦政府の資料の量は、日本政府の1,500万ファイルどころではなくて、その数倍、数十倍の量があります。そして、そのうち2%から3%だけが連邦公文書館に入っています。

というわけで、文書館に入って来る段階の評価、選別ということで、プロフェッショナルなアーキビストが目を通します。入って来たものは全部目録をとって目録情報を公開していますから、利用者は、国民でも、外国人であっても、その目録情報にもとづいて、閲覧を要求してきます。それに対して、見せていいかということをもう一度、提供段階で審査します。見せられないということになったら、要求があっても拒否します。ここが図書館と違うところです。日本では、先ほど言いましたように、2011年の4月1日から、国民は利用請求権を持っているということになりますから、利用者の公開・閲覧要求と公文書館側の公開規則に基づく非公開、または部分開示との間で、かなり厳しい闘いを展開しなければならないかもしれません。

そのときに基準になっていることを少し申しますと、情報公開法の第5条準拠ということになっています。ナショナルセキュリティに関するものは駄目、外国との約束事、条約に絡むものは駄目、それから個人のプライバシーに関わるものは駄目、というのが主な柱になっています。

[司会・吉田]

公文書について、具合的にお話しいただきました。皆さんも、この間の状況について具体的なことがお分かりになったと思います。それではもうひと方。

[参加者]

三輪先生が「受験してくれ、受験してくれ」と言われるので、セールスの場でもあると理解します。その観点から言えば、養成する人材像として、あと2つくらい入れてもバチは当たらずに済むかと思っています。それを聞いたら「俺も受けたいなあ」という気持ちになると思います。

なにかというと、一つは起業家になりませんか、ということです。図書館情報学を知っている人がみると、グーグルなどは図書館情報学のアイデアの寄せ集めやんけと思うわけです。クイック(KWIC=Key Word In Context)と自動抄録とサイテーションインデックスを創造力豊かに組み合わせたら、あの原型、できるやんけと、こう思うわけです。残念ながらグーグル作った人はコンピュータ工学の人ですね。アメリカのライブラリースクールは、アホな教え方をしてたんです。そうではなくて、ウチとこは、アメリカのライブラリースクールとはちがい、図書館情報サービスの考え方、アーカイブズの考え方を、応用力豊かに教えます。活用できるようにします、と。なおかつ、富浦先生はユーザーの視点と言われましたが、マーケティングなども持ち込んで、ユーザーの視点に合った形で提供できるようにします。起業の仕方教えます。大金持ちに是非なってください、と。そうすると、1,000億、2,000億、1兆、2兆の企業をつくった人は、ここの研究科にガッポガッポ寄付してくれて、ウハウハになるわけですね。2、3人も現れたらお金が使いきれなくなります。そういったアピールも必要でしょう。

そこまでいなくても、企業に勤めるにしてもそうです。有川先生はコンテンツを扱うんだと言われましたが、たとえばいま、ウェブの資源は消費されているばかりなんですね。ウチとこの研究科を出た人は、ウェブの資源をちゃんとしたかたちでまとめて、メタデータを付けて、なんぼでも再活用できるようにしますよ。すごいでしょ、と言ったら、企業は、こんな世界があるのか。ウチとこに来て欲しい、と呼びますね。

それから今、タクソノミーといってウェブの情報資源の分類の話があるわけですが、あーいったタクソノミーにしてもチンケな分類です。NDCの日本十進分類法の話が今日出ましたが、あれよりもチンケなのがいくらでもあります。そうではなくて、図書館情報学の分類法理論をピシッと、この研究科で教わった人がウェブのタクソノミーを作ったら、また違うのができると思います。そうすると、九州大学はタクソノミーを作らせても凄くないか、ということになります。そうやって10年、20年経って、ビジネスの世界で活躍している人は皆、九州大学卒業というくらいやられたらいいと思います。ですから、あと2つ、「起業家」と「ビジネスの世界で活躍できる人」と入れたら、受験生はウハウハになると思いますので、是非面白い研究科をお作りください。

[富浦]

社会における人材のニーズについて、アンケート調査を行いました。その結果によると、「起業家」はなかったのですが、企業において情報を活用したマーケティングや企画の担い手という人材のニーズはありました。専攻紹介のなかに掲げている予想される進路のなかには具体的には挙げていませんが、広く考えれば、情報管理、提供組織の管理者の養成ですね。ライブラリーサイエンス専攻では、問題解決、戦略立案などのマネジメント能力の育成が重要と考えています。その意味では、企業におけるマネジメント、企画・運営という部分も念頭においています。

[参加者]

そういう側面もあるでしょうが、私が申し上げたのは、コンテンツ面からも企業で活躍できる人が育てられるのではないですかということです。ウェブ情報源を再活用できる人とか、タクソノミーを組み立てられる人を例として挙げたわけです。情報を再活用可能なかたちでちゃんと調べたり、まとめた

りして、今は消費しているばかりだと思いますので、きちんと編集してメタデータ等をつければ、再活用の組み合わせがいくらかでも無限に広がるような世界ができるのではないのでしょうか。

[富浦]

それもやっていこうとしていることの一つです。個々の文書、情報を提供するだけでなく、全体としてどういうふうになっているのか、それを解析する分野があります。ウェブの情報に限って言えば、先ほど言われたようなことになると思います。さまざまな情報を組織化して、最終的には情報分析の方向にいければよいと考えています。

[三輪]

起業家とウェブの再活用について、私はまったくなにも考えていませんでした。ですから非常によいアドバイスとして重く受け止めたいと思います。

ライブラリーサイエンス専攻で、レコードマネジメントを企業に売り込むために何を強調しなければならないかですが、私が考えたのは、これをやることで企業の組織を活性化することです。レコードマネージャーを入れることによって、企業全体が組織として活性化する。そういうふうになれば、学生はどんどん来るのではないかと考えました。

[司会・吉田]

有川先生の手が挙がっています。お願いします。

[有川総長]

実は、テキストマイニングとか、ウェブマイニングというところがありまして、その辺で、先生のご指摘のところにしっかり応えられると思っています。これは織り込み済みでして、そういったことがやれる人も、新専攻のなか、あるいはシステム情報系には十分おります。

[司会・吉田]

もうひとつ、手が挙がっていたと思います。

[参加者]

ユーザーの視点といわれる意味、図書館と利用者のニーズのズレに関して、もう少し突っ込んでお話しただけであればありがたいと思います。

[富浦]

ユーザーの視点というのは、ユーザーが欲しい情報がちゃんと手に入る、提供できるような組織化がなされているかどうか、ということです。現在行われている情報の組織化は、ユーザーから見たときに欲しいものが手に入るような組織化になっていない。このように言いきりますと、私は図書館情報学の専門ではないので怒られるかも知れませんが、そのように見えます。

たとえば、利用者には非常に近い種類と感じられる書籍が、日本十進分類法ではまったく違うところに入っているということがあります。私がかたまま境界領域のところを専門としているからかもしれませんが、そういったことがないようにしたい、ということです。

また、アーカイブズであれば、学問としてはしっかりしているのですが、それを学んだ人が実際にレコードマネージャーとかアーキビストとして活躍しているわけではないようです。現場では、たまたま仕事の必要に迫られて、言わば素人が関係の資料を管理していることが多い。アーカイブズ学なり、記録管理学なりをきちんと学んだ人が情報の管理をすれば、利用者と管理者との間のズレがなくなるという側面もあります。

ユーザーの視点とは、有効な利用活用のために、ユーザーが欲しいものを提供できるよう管理する側が考えましょう、管理組織の都合ではなくてユーザー側から考えていきましょう、ということです。抽象的な説明ですみません。

[参加者]

千差万別のユーザーがいますが、それらに一定の基準で対応できるのでしょうか。

[司会・吉田]

私の方からちょっと補足したいと思います。

私は、授業では、学習科学とコミュニケーション論、コミュニケーション演習を担当します。ユーザーが何を考えているのか、何を欲しがっているのかということ、サービス提供者として「よく聞く」、ユーザーが何を求めているかを「聞き出す」ためにはいろいろな方法がありますが、実際には対面というケースが多いと思います。私はもともと医学を専門としているので、患者さんがどういうことを求めているかを聞き出すことが大事なのですが、いまの医療者は話を聞くのがすごくヘタなのですね。医療従事者はコミュニケーションがよくできないと、患者さんとの間でニーズにズレが出てしまうということで、いま医学部ではコミュニケーションを教えるようになっています。おそらくは情報についても、ユーザーが何を求めているのか、ユーザーの視点とはどんなものなのかを知るためには、管理、提供する側が、個々のユーザーの求めているものを知らなければならず、そのためには適正なコミュニケーションが必要である、というふうに考えているという状況です。

[植松]

このことに関して申し上げますと、先ほど触れました「知識再生産の場としての図書館」という観点からは、「あっ、こんな本があったのか」と、書架を巡ることによって発見する楽しさというものが、場としての図書館には絶対にあるわけです。特定の本を探している人にとっては、ピンポイントでこの本がこの場所にあるということも大事で、ファストライブラリーとしてはそうだと思います。しかし、たとえば東北大学の図書館長の野家先生がおっしゃられるには、大学図書館などでは逆に、迷わせることに教育効果がある、「迷宮のような図書館」と言いますか、バラバラな状態で並んでいるとか、よく分からないとか、スローライブラリーというようなものにこそ、大学図書館の意味があるのではないかと。私もぐちゃぐちゃな図書館というものを是非作ってみたい、と思っているところではあります。

[司会・吉田]

高山先生、お願いします。

[高山先生]

いまお話しに出ています知的創造空間をどう作るかという問題は、それはそれで大事なことだと思います。紙の本がどんどんデジタル化されていったときでも、図書館という空間はそれなりに必要だろうとは思いますが。ただ、先ほどから話題となっているユーザーの視点の欠如や、ユーザーが欲しい情報と提供した情報のズレというのは、これとは違う意味で提示されていると理解しておりました。

私の講演で、情報分析、インテリジェンスが重要と申したのがそのことなのですね。意思決定者に対して必要な情報を、どのように提供できるか、ということです。たとえば軍事的、外交上の危機的イベントが勃発し、必要な情報を集めて結論を出せということになったとき、適合文献としてのさまざまなレポートやファイル類が机の上にならなくとも、すぐに結論を得て、指示を出さなければいけないときに、即座に結論を出せる情報を提供できるような状況でないといけない。その仕事をライブラリアンやアーキビストが直接担当するわけではありませんが、そのための基礎になるような情報提供の準備をどうしたらいいのかについて、

私の講演のなかで触れておきました。

先ほど簡単にお話したのは、1936年の時点で、アメリカは「日本と戦争を開始したときに、日本はどうなるのか」ということを分析したものです。この分析結果が意思決定者への情報サービスなのです。ルーズベルトは日本が戦争を仕掛けてくるということを知っていて、それをいかにも不意打ちをされたように装ったというようなことが、アメリカのジャーナリズムの世界でよく言われるようですが、それは、事実関係はともかく、「日本の連合艦隊が12月8日に向けて、択捉島の単冠（ひとかつぶ）湾を出港したぞ」とか、あるいは「北太平洋のどの地点で、空母から攻撃隊が発進したぞ」というような情報は、ルーズベルトには確かに届いてはいなかったかもしれませんが、しかし、アメリカ側は事前に、「日本と戦争しなければいけないかも知れない。日本から仕掛けてきたら、どのようにするのか」について、情報分析の準備をしていたのです。この準備は情報サービスにとっては当然、行うべきことです。

この資料（高山講演 PPT, nos 22, 23）に書きました内容は、実は、私が係わっていた某電機メーカーによるミニコンピュータのマーケットへの参入についてのものです。守秘義務の観点から、アーキビストとして公開するには30年原則を守らなければなりませんから、昔の資料でないと出せませんので、古いものを出しました。すなわち、ミニコンピュータの市場が大きくなってきたときに、そのミニコンのマーケットに参入すべきかどうかを判断するための情報を、経営者から求められたときの作業プロセスです。一番左側の青いところは全部、公開の情報資料です。新聞であったり、雑誌記事であったり、あるいは社員のさまざまな営業報告書であったり、技術報告書であったりというようなものが集まっています。これらの資料が図書館から適合文献として提供されます。ここから一番右側の赤い「最終報告」にまで、その文献の情報が分析加工されるわけです。「最終報告」を出すためには、その前に最終報告を構成する部分結論を引き出す必要があります。ここでは、これらの部分結論の構成要素に合致する情報をグルーピングするわけです。こういう報告書を情報として提出してはじめて、経営者はいろいろなこと意思決定ができるということです。ミニコンピュータ市場は有望かどうかの情報を経営者から求められたとき、それについて書かれている沢山の図書や雑誌記事をただ出したのでは、このチャートの一番左側の資料をそろえただけでサービスを終えていることになります。これでは情報サービスを提供している人間としての価値を問われるわけです。これは土光敏夫さんが実際におっしゃった言葉ですが（古い話なので男女差別の言葉が入っていてすみませんが...）、「適合文献を提供するだけだったら、気の利いた女の子が2、3人いればできる。お前ら、大の男が集まっているんだからちゃんとした仕事をやってみろ」ということになります。

図にのって、もう少し具体的な例を挙げますと、私が手掛けた例を3つほど紹介できると思います。一つはカラーテレビです。最初、カラーテレビは真空管方式でした。それがやがて半導体素子に変わっていきます。そのときのことで、それまでテレビのマーケットシェアのトップを握っていたのは東芝でした。当然、東芝は真空管の主要メーカーであり、高電圧に耐え得る半導体素子の開発は遅れていました。新たな半導体素子を日立が開発に成功したので、「これでマーケットシェアを日立にひっくり返される」と、東芝側が覚悟をしていたわけです。ところが現実にはどういったことが起こったかと言いますと、日立がトップに立ったのではなくて、何と「パナソニック（現）」がトップに立って、日立が2位、東芝が3位というシェアの順位になったのです。「これは一体、どういうことだ」ということで、その分析をやったところ、製品の機能といった問題ではなくて、販売戦略上の問題だということが明らかになりました。要するに、日立が「新しくカラーテレビを出します」とやって、消費者の眼をそちらの方に向けさせようとする、パナソニックが「当社もこういうものを出します」と、製品化のメドが立っていないのに、パッと対抗する。アナウンス効果ですね。それをきちっとやっていくことで、シェアが上がっていくという状況が分かり、技術開発よりも販売営業戦略立案の参考になりました。

次の例ですが、当時、重電メーカーも家電市場にも製品を提供していました。日立も東芝も三菱も家電市場に製品を供給していたのですが、「どうも三菱の動きがおかしいから、調べてくれ」ということになりました。家電マーケットというのは季節性があって、季節ごとに製品ラインを一斉に揃える、たとえばカラーテレビであれば、大型から小型までざっと揃えてマーケットに出すという商慣習があった

のですが、三菱については、関係の文献、新聞、報告書等を分析すると、ある時点からこれが非常に乱れ始めたのです。カラーテレビだけでなく、あらゆる家電製品についてそのような傾向が出てきたということで、「三菱は家電市場から撤退しますね」と結論を出しました。家電事業部の方は、その結論に応じて体制を組み替えたということがあります。

情報分析の成果が一番大きかったのは、東芝のコンピュータマーケットからの撤退だと思います。当時、東芝のコンピュータ事業部は大赤字を出してしまっていて、経営陣にとってはそれが頭痛の種でした。それに対しコンピュータ事業部長は、「コンピュータ事業とは、本来赤字が出るものである。けれど、他の事業部で製造する製品の基礎部品となるコンピュータは、自社のコンピュータ技術を維持していくうえで絶対に必要である。赤字が出るのはコストだと思って覚悟して欲しい」、と役員会で言ったのです。たしか副社長の発言だったと思いますが、「それはおかしいのではないか」ということになり、技術担当の専務取締役役に「技術情報センターに調べさせる」という話になったのです。この場合には、先ほど有川総長が言われたテキストマイニングの方法をとりました。「有価証券報告書」という特定の資料を徹底的に分析した結果、「富士通はコンピュータ事業でちゃんと黒字を出しているではないか。有価証券報告書に報告されている数字はでたらめではない」ということが、いろいろな面から裏付けられましたので、そのように報告しました。これがきっかけになって、東芝は汎用の大型コンピュータから撤退することになりました。事業部長はたしかどこかへ転任されましたが、当時の技術情報センター所管の技術本部長と大変な論争がおこなわれたと聞いております。

このように、情報要求をしている人たちが求めている情報を、きちっと提供できるということが非常に大事だと思います。それは適合文献を提供するというレベルで終わってよいのかということです。そこを担える人間を、ライブラリーサイエンス専攻では是非養成していただきたいと思います。もちろんこの情報の分析能力の養成は国家の内政・外交のレベルでも同じように要求はあると思いますが、ビジネスの分野でいくらかでも応用が利くわけです。特に優秀な人材であれば、当然のこととして、国のしかるべき機関からのスカウトもあり、就職市場の需要については全く問題ない、というふうになっております。

[司会・吉田]

残り時間も少なくなりましたので、最後にこれだけは質問、コメントしておきたいとお思いの方がおられましたら、お願いいたします。

[参加者]

以前、別の機会にも新専攻の紹介を伺ったのですが、やはり今回もモヤモヤしているところが1カ所だけありまして、それをお聞きしたいと思います。

私は、名刺に一応「図書館情報学」と銘打っているのですが、ユーザーの視点に立つと、これまでの図書館情報学やアーカイブズ学では現状に合わないところがあるということですが、具体的にはそれは一体何なのかをズバリ知りたいのです。お答えいただけたら幸いです。

[富浦]

たとえば図書館情報学であれば、内容にもとづく固定的な組織化をやっていますね。それがだめだと言うのではないのですが、それを一生懸命教えるよりは、どういう分類が求められているのかということ自体を再検討する、あるいは、情報科学において、機械的に大量のデータを自動的に組織化するようなことを考える、ということです。

これまでの学問のなかに、むだな部分あるとは思いません。そうではなくて、現状に合っていない部分を再検討することで、「力点のバランス」を変えていく必要もあるのではないかと考えるわけです。既にある、たとえば図書館の十進分類法にしても、いらぬというわけではありません。これらは新しい分類を考えるときには当然基本にするもので、かりに自動化、組織化する場合でも、さまざまなやり

方を組み合わせることで、新しい知見が得られる可能性があると思います。これでお答えになっているでしょうか。

[司会・吉田]

ありがとうございました。そろそろ時間になりました。とてもとても活発なご議論をありがとうございました。パネリストの先生方、どうもありがとうございました。フロアの皆さんもどうもありがとうございました。

いただきましたご議論、ご意見、特に養成する人材像にあと2つ加えた方がいい、というご意見は、私たちにも非常に参考になりました。皆さま方のご意見を活かせるよう、開設に向けて準備をすすめていきたいと思います。

[全体司会]

プログラムも終りに近づいてまいりました。九州大学ライブラリーサイエンス専攻では、情報をめぐる環境が大きく変動しているただ中であって、これまでの蓄積を大事にしながらも、さまざまな領域の方々とパートナーシップを組みながら、より広い世界を拓いていけたらと考えております。本日頂戴したさまざまなご意見を、大変力強い後押しと受け止めさせていただきまして、精進してまいりたいと思います。

それでは、本日のシンポジウムの閉会にあたり、九州大学副学長、附属図書館および大学文書館館長の川本芳昭先生より、閉会のご挨拶をいただきます。

[川本副学長]

本日のご講演、パネルディスカッションを通じて、ライブラリーサイエンス専攻をめぐる世の中の現状、さらには今後の展望等が明確になったかと思えます。図書館の会議等で全国に出てみますと、今回のライブラリーサイエンス専攻設置について、多くの方々が非常に関心を持っておられることが肌身にひしひしと感じられます。ようやくここまで漕ぎつけたわけですが、それには非常に多くの方々の長いご尽力があったことが分かりました。本日登壇された方々、事務の方々を含めて、ここで厚く御礼申し上げます。

と申しましても、ようやくスタートラインに立ったばかりです。博士過程の設置を等も含めて今後ますます高いハードルが予想されますので、皆さま方の変わらぬご尽力とご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。ありがとうございました。

「ライブラリーサイエンス専攻」概要

学 府 名 九州大学大学院統合新領域学府 Graduate School of Integrated Frontier Sciences
専 攻 名 ライブラリーサイエンス専攻 Department of Library Science
学 位 名 修士 (ライブラリーサイエンス) Master of Library Science
入学定員 10名

プレスリリース資料 (2010年11月17日)

大学院統合新領域学府にライブラリーサイエンス専攻を設置

～ユーザーの視点に立った情報の管理提供における、新たな教育研究を展開～

概 要

九州大学では、平成23年4月、大学院「統合新領域学府」の第三の専攻として「ライブラリーサイエンス専攻」を開設します。

「ライブラリーサイエンス専攻」では、ICT環境の真ただ中におかれる現代情報社会の急速な進展に対応するため、ユーザーの視点に立った情報の管理と提供を確保し、同時に知の創造と継承を支えるあらたな「場」（これを「ライブラリー」と呼びます）に求められる高度な専門人材の養成を目指します。

新しい発想にもとづくこのような大学院は、我が国で初めて設置されるものであり、関係学界、業界から熱望されていたものです。

背 景

20世紀後半におけるICT環境の急速な発展に伴い、知識や情報をめぐって社会は大きく変容しています。その反面、従来の法制度や技術ではもはや充分に対応できない新規で重要な諸問題がつつぎに生起しています。

今日、情報の海から真に必要な情報をえることに困難を感じるものが少なくありません。また、新しいメディアでは、その来歴や真正性、正確さ、著作権の取り扱いが不分明な情報も氾濫しています。他方、年金資料や外交文書の不適切な管理、裁判資料の改竄などが大きな社会問題となるなか、組織運営の基盤である文書記録管理の重要性が改めて認識されています。

このような状況において、緊急の課題として浮かび上がっているのが、知や情報の適切な管理とアクセスの保証であり、その基盤となるのが信頼できる流通、管理、そして活用のシステムです。また、組織の有効な運営戦略のためには、ステークホルダーや市民に対するコンプライアンス、情報公開とこれを可能とする適切な文書記録管理が不可欠です。

内 容

本専攻は、高度な専門職を養成する大学院専攻です（修士課程・入学定員10名）。

「図書館情報学」と「アーカイブズ学（文書記録管理学）」を基盤として、法学、学習科学、情報学等

の知見を交えつつ、ユーザーの視点にたった情報の管理と提供を可能とする、新たな知の創造と継承の「場」(=「ライブラリー」)を教育研究の対象とします。本専攻のように、公共性を重視して情報の管理と提供の「場」を科学する試みを展開すること、また文献著作と文書記録の両者を統合して取り扱うことは、わが国では初めてのことです。

多様な専門と背景を持つ人材が入学することが予想されるため、教育ニーズに対応できる履修モデルを可能とする多彩なカリキュラムを組むとともに、指導教員は、学生一人ひとりの適性に応じて、きめ細かい履修指導を行います。教育方法にも工夫をこらし、チームランニング (PTL) やインターンシップ等を用いながら、実践的な知の習得をはかります。

効 果

本専攻では、高度な専門知識と実践志向性にあふれた人材を養成します。アーキビスト、レコードマネージャー、システムエンジニア、サブジェクトライブラリアン等の専門職はもちろん、専門的な知識を有する管理職の存在は、これからますます必要とされるでしょう。

このような教育研究活動は、わが国においても、画期的な意味を持つと考えられます。時代の要請に対応する新しい発想に基づく学際大学院として、関係学界、機関から強く期待されています。

本専攻は、地域においても重要な貢献を果たすことが予想されます。地域の文化的中心機能が期待されている図書館や、その重要性の認識がますます高まる文書記録管理組織等に対して、人材の供給や研究開発支援などを行うことを通して、地域の研究・教育拠点として機能、発展することが期待されます。

あとがき

本書は、2011年4月に、九州大学に新しく発足する大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻の設置を記念して、2010年12月18日(土)に、九州大学中央図書館視聴覚ホールにおいて開催されたシンポジウムの内容を抜粋再録したものです。このシンポジウムは、新専攻のお披露目とともに、とりわけ図書館情報学とアーカイブズ学の現状と未来を再考し、本専攻の取り組むべき課題を展望することを目的として企画されました。専攻設置準備委員会、附属図書館、大学文書館との共催で準備され、さらに西日本図書館学会、九州地区大学図書館協議会の後援をえました。

当日は、全国から160名を超える参加者をえて、活発な意見交換が行われたほか、同時開催された学生募集のための入試説明会でも多くの問い合わせを受けるなど、新専攻に対する関心の高さを窺わせました。

当日の全プログラムは、以下のとおりです(敬称略)。入試に関する個別の問い合わせは、会場にブースを設け、開会前、休憩中、閉会後に受け付けました。

開 会 挨拶：塩次喜代明(大学院統合新領域学府長)

新専攻の紹介：富浦洋一(大学院システム情報科学研究院准教授、ライブラリーサイエンス専攻専任予定教員)

講 演：高山正也(国立公文書館長)

植松貞夫(筑波大学大学院図書館情報メディア研究科長)

(休憩)

総 長 挨拶：有川節夫(九州大学総長)

パネルディスカッション

パネリスト：高山正也、植松貞夫、倉田敬子(慶應義塾大学文学部教授)、三輪宗弘(附属図書館付設記録資料館長、ライブラリーサイエンス専攻専任予定教員)、富浦洋一

司 会：吉田素文(大学院医学研究院教授、附属図書館副館長、ライブラリーサイエンス専攻専任予定教員)

閉 会 挨拶：川本芳昭(副学長、附属図書館長、大学文書館長、大学院人文科学研究院教授)

本書編集に際しては、当日の音声記録をもとにしながらも、あらたにとりまとめられた原稿を掲載しました。とりわけ、パネルディスカッションに関しては、書物としての読みやすさへの配慮等の理由から、全面的な再編集となっています。当日、フロアからご質問、ご意見いただいた方々を含めて、関係者の皆さまのご理解、ご寛恕をお願い申し上げます。

ライブラリーサイエンス専攻の設置は、多くの方々の長年にわたるご努力の結果ですが、なかでも有川節夫九州大学総長のお名前を逸するわけには参りません。附属図書館長在任時から発揮され続けてきた、有川総長の強い意志とイニシアティブなくしては、新専攻の今日はありませんでした。紙面の関係から、本書には掲載できませんでしたが、シンポジウム当日は、特にご挨拶いただき、新専攻について熱く語っていただきました。

今回のシンポジウムでは、新専攻構想の段階からなにかとご助言をいただいたお二人の先生方にご講演をお願いしました。また、パネリストの一人である倉田先生は、新専攻においても非常勤講師としてご協力いただくことになっています。ご多忙のさなか、ご無理なお願いにもかかわらず、こころよくご登壇いただいた先生方に、あらためて御礼申し上げます。

また、師走の慌ただしいころにもかかわらず、ときには遠路より、シンポジウムにご出席いただいた

多くの参加者の皆さまに、あらためて御礼申し上げます。お陰さまで、大変有意義な意見交換の場となりました。

最後になりましたが、このシンポジウムの開催を含め、新専攻の設置準備にご尽力いただいた皆さまに、深く御礼申し上げます。

九州大学の大学院ライブラリーサイエンス専攻は、未知の旅へと踏み出します。今後とも、ご指導、ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

執筆者紹介（五十音順）

植松 貞夫（うえまつ・さだお）

筑波大学大学院図書館情報メディア研究科長・教授

専門領域：図書館情報学、とくに図書館建築、建築計画

主要編著：『よい図書館施設をつくる』（日本図書館協会、2010年）、（編）『図書館概論』（樹村房、2005年）

倉田 敬子（くらた・けいこ）

慶應義塾大学文学部教授

専門領域：図書館情報学、とくに学術情報流通

主要著書：『学術情報流通とオープンアクセス』（勁草書房、2007年）

塩次 喜代明（しおつぐ・きよあき）

九州大学大学院統合新領域学府長、経済学研究院教授

専門領域：企業管理、経営戦略、国際ビジネス

高山 正也（たかやま・まさや）

国立公文書館長、慶應義塾大学文学部名誉教授

専門領域：情報管理、記録管理、図書館運営論、図書館政策論

主要編著：『図書館・情報サービスの理論』（勁草書房、1990年）、『公文書ルネッサンス』（内閣府、2005年）、『図書館経営論』（樹村房、1997年）、『市場化の時代を生き抜く図書館』（時事通信社、2007年）、『日本における文書の保存と管理』（『図書館・アーカイブズとは何か』別冊『環』No.15、2008年所収）

富浦 洋一（とみうら・よういち）

九州大学大学院システム情報科学研究院准教授、ライブラリーサイエンス専攻専任予定教員

専門領域：自然言語処理

三輪 宗弘（みわ・むねひろ）

九州大学附属図書館付設記録資料館長、ライブラリーサイエンス専攻専任予定教員

専門領域：経営史、科学技術史、軍事史

吉田 素文（よしだ・もとふみ）

九州大学大学院医学研究院教授、附属図書館副館長、ライブラリーサイエンス専攻専任予定教員

専門領域：医学教育学

ライブラリーを科学する

九州大学大学院統合新領域学府ライブラリーサイエンス専攻
設置記念シンポジウム報告書

平成23年3月発行

編集発行 九州大学大学院統合新領域学府
ライブラリーサイエンス専攻設置準備委員会
〒812 8581 福岡市東区箱崎6 10 1

印刷 城島印刷株式会社
〒810 0012 福岡市中央区白金2 9 6
